

『若者はなぜ へと向かう のか』地方

Report.3

連続シンポジウム

「少子化の流れに抗して」

2015年8月1日[土]13:00～

こうち男女共同参画センター「ソーレ」

主催 公益社団法人 高知県自治研究センター

講師

宮台真司

首都大学東京・都市教養学部教授



目 次

1. 開会挨拶 2

高知県自治研究センター代表理事 筒井 早智子

2. 基調講演 4

「若者はなぜ地方へと向かうのか」

講師 宮台 真司 氏（首都大学東京・都市教養学部教授）

3. パネルディスカッション 22

パネラー 宮台 真司 氏

イケダ ハヤト 氏（プロブロガー）

吉村 沙貴 氏（高知県立大学文化学部）

コーディネーター 東森 歩 氏

（ファン度レイジング・マーケティング代表・高知県自治研究センター理事）

1

開会挨拶

連続シンポジウム「少子化の流れに抗して」

第3回『若者はなぜ地方へと向かうのか』

司会 石川 俊二

皆さん、こんにちは。大変多くの皆さんにご参加いただきまして誠にありがとうございます。

今日は連続シンポジウムの3回目なんですけども、前2回は事務局の意気込みとは若干異なって入りのほうが今ひとつでしたが、今日はこれまでよりもはるかに多い皆さんに来ていただきました。明らかに宮台効果ではないかなと思うんですが、早速始めていきたいと思います。

開催にあたりまして、主催者である公益社団法人高知県自治研究センターの理事長、筒井早智子よりごあいさつを申し上げます。



高知県自治研究センター代表理事 筒井 早智子

皆さん、こんにちは。ほんとにたくさんお集まりいただきまして、ありがとうございます。

高知県では平成2年に、全国のトップを切って人口の自然減に転じました。生まれてくる子どもの数は平成2年当時の4分の3に減少しておりまして、依然としてその傾向が続いております。高知県では、未婚化・晩婚化の状況や高い共働き率などの実情を踏まえた取り組みをしておりますが、昨年度から少子化対策の抜本強化と女性の活躍の場の拡大を重点施策に加えまして、対策を強化しております。

このような動きの中で、当センターでは、市町村消滅の最大の要因は高齢化ではなく少子化であるという考えのもとに、高知県や市町村が進めております少子化対策にスポットを当てまして、これからの地域づくりを考えるシンポジウム、「少子化の流れに抗して」をテーマに開催することにいたしました。今回が3回目となります。

第1回は今年2月に開催しましたが、『「消滅する市町村」論を検証する』として、増田レポートの検証と



逆の流れである「田園回帰」の全国的な状況につきまして、基調講演とパネルディスカッションを行いました。

第2回は、高知県でも取り組みが始まっております移住促進について、移住促進の先進県であり、人口規模や高齢化率、中山間地域を多く抱えている状況など非常に高知県と共通するところが多い島根県から、島根県における状況や支援の体制や手法について学ばせていただきました。島根県では、お聞きしますと、20年ほど前から少子化問題の対策に取り組んでおりまして、多くのエリアで4歳以下の子どもさんが増えている。そしてその大半が山間部とか離島などでした。その動きの主導となっておりますのが子どもを持つ30歳前後の女性ということでございます。

そして今日が第3回ですけれども、「若者はなぜ地方へと向かうのか」です。NPO法人ふるさと回帰支援センターによりますと、リーマンショック以降、地方への移住相談が非常に増え続けておりまして、去年は1万件を超えたということです。しかも20代～30代の若い世代の方がその3分の1を占めていると聞いております。都市部から地方へと移動している若者が増加している現象の背景にある社会経済構造の変化と、経済的な豊かさよりも別の価値を見出して地方に向かおうとする若者の価値観の転換について学ぶことといたします。

今日は非常に長い時間となりますが、どうか最後までよろしくお願いいたします。

(司会)

ありがとうございました。

それでは、基調講演の講師である宮台真司先生のご略歴をご紹介します。

宮台先生は1959年3月に仙台市でお生まれになり、東京大学を卒業の後、現在首都大学東京で教授を務めておいでです。専門は権力論、国家論、宗教論等々ございますが、皆さんご案内のように、非常に幅広い分野で、かつ深い内容で評論や発信をされていらっしゃると思います。

それでは早速、宮台先生よりよろしくお願いいたします。

2 基調講演

「若者はなぜ地方へと向かうのか」

首都大学東京・都市教養学部教授 宮台 真司 氏



宮台真司と申します。どうも初めまして。よろしくお願いします。

ちょっと今、筒井さんのお話を伺って「少子化」のテーマが出ましたので、そのつながりで皆さんにお示ししたいデータがあります。つい最近、精神分析関連の学会で僕が使ったデータなのですが、少子化の原因になっているのは、いわゆる晩婚化とか未婚化ということではなくて、もっと重大な問題、つまり性からの退却が生じているんですね。性からの退却が生じている背景に、とらなければいけないコミュニケーションが皆さんうまくとれなくなっているってことがあるということだけちょっとお話をして、これ、僕の今日の本編につながるんで少しお話をしますね。

若者のコミュニケーションの希薄化

性的退却の現実1「交際率」。今付き合っている相手はいるかどうかということです。交際相手がいる20代未婚男性は22%、女性は42%、30代未婚男性は15%、女性は33%、40代未婚男性は12%、女性は22%というふうに、交際率はどの年齢でも女性は男性の2倍です。これはもう過去20年間ぐらい変わらないデータです。

これはすぐ疑問に思っていた方がいいと思うんだけど、統計的に数字が合わないですね。どういうことかと言うと、これはつまり男性が二股、三股かけてるか、あるいはものすごい頻度で相

手を変えてるかっていうことなんですけれども、どうしてそういうことになってるのかというのは後で時間があればお話をします。女性から見た場合に付き合うに値する男性がいなくなったということが、簡単に言えば背景にあります。

性的退却の現実2、これは「交際未経験率」。誰とも交際したことがないっていうふうに言う人です。交際経験のない20代未婚男性はなんと4割です。女性は2割です。交際経験のない30代未婚男性は34%、女性は16%、40代未婚男性は24%、女性は13%。交際経験がないと答える女性は、どの年齢でも男性の2分の1あるいは2分の1以下です。男性の方にとっても女性の方にとってもなかなか厳しい統計だと思います。

性的退却の現実3「未交際率」の推移。つまり先ほど申し上げた、誰とも付き合ったことがないと答える人間の割合。これは1992年をピークにしてどんどん未交際率が増えてきているんですね。これが性的退却の現実の3です。

次に性的退却の現実の4、今度は「性体験率」の推移です。これは高校生と大学生に分けて、男女それぞれの性体験率を見ています。今の男子大学生は63%、今と言ってもこれ5年前ですが、2011年の段階でピークよりも8ポイント下がりました。女性の大学生もピークは61%ですが、今は48%まで下がりました。男子高校生もピークが27%で今15%、半減ですね。女子は30%から23%まで下がりました。

ものすごい勢いで性的な退却が進んでいて、これ

止まらない状況です。

後で時間があれば、どうしてこういうことになっているのかってお話をしますが、今、行政がいわゆるマッチングサービスをやっていますが、ほとんど意味がないですね。どうして意味がないかと言うと、実は恋愛系のワークショップを過去2年間ぐらいやってきたんですが、分かりやすく言えば、例えば出会うところまでとかセックスするところまではいけるんですけども、きずなをつくる、あるいは深い人間関係をつくるという能力がものすごく欠けてきているんですね。

ものすごい勢いで下がってきているので、残念ながらマッチングではなくて、マッチングした後どうやったら深いきずなをつくれるのかということに最大のポイントがあるんですが、その部分について行政は、実は厚生労働省の役人にいろいろ聞いたんだけど、介入できないんです。人間関係をどう営むかって価値観の問題なので、それは民間でやる以外にないんだというのが役所の考えなんです。

今お話ししたことは、若い人たちのコミュニケーションが全体としてもものすごく希薄になっていて、きずなをつくれないう。だから、性の領域にも乗り出せないし、性だけでなく親友、親しい友人関係のつくり方も昔に比べるとものすごく下手で、腹を割るとか、肝胆相照らすとか、気の置けない仲にな

るとかっていうことが非常にできない、そういう状況です。

起こるべくして起こった価値観の変化

さて、本編、お手元の資料に従ってお話をしていくのですが、今日のポイントは、地方回帰が進んできている背景にどういう価値観の変化があるのかということをお話します。その価値観の変化は、実は学問的にはこれまでの分厚い蓄積の中で、共有されてきたことなんです。もっと言えば、そのような価値観の変化が起こるべきだというふうに多くの識者たちが、日本だけじゃありません、むしろ海外の識者たちがずっと述べていた。その変化がやっと起こってきているんだ。つまり、良いことが起こっているんだというふうに考えることができます。

例えば、昔の若い人たちは親が喜ぶ仕事に就くっていうのを就職だと考えていたのです。だから、中小企業よりも大企業を望むし、あるいはテレビで広告をやっているような消費者向けの物品やサービスを販売している会社に就職しようとするんです。でも、日本の優良企業の大半はテレビコマーシャルをやっていない。業界の人間だけが知っている、素晴らしい技術を持った中小企業、あるいはパナックの





若者はなぜ地方へ向かうか？

高知県自治研究センター

15.08.01

首都大学東京 人文科学研究科 教授 宮台真司

ような、結構大きいけれどもしかしテレビでは絶対にコマーシャルをやらないというようなそういう会社。ところが、そういう会社を親も知らなかったりするんです。

学生たちは残念なことにちょっと愚かなので、そういうところまで探索しないんですね。ところが最近やっぱり変わってきて、それは親が自信がなくなったってことが背景にありますけれども、子どもたちが親の価値観に左右されないで、自分がいいと思う人生を自分でつくるっていうふうに思う人たちが出てきた。その親が自信がなくなった姿を見ているというのもあるし、親と同じ人生を送ってもしょせんクソだっていう、言葉が汚いんですがごめんなさい(笑)、そういう認識がやっぱり広く広がってきたということが背後にあります。今、申し上げたように、親と同じように生きてもしょせんクソだっていうような社会の空洞化っていう概念と結び付いていたりするんですね。

地方回帰の若者たちが気づいていること①

- 「社会の空洞化と、若者たちの窮状」の教訓
 - ▣ 社会的包摂のない社会は「カネの切れ目が縁の切れ目」
 - ▣ そうした社会は「社会を生きるのが稔りある」との感覚を喪失
- 「社会の空洞化への思想的対応」の教訓
 - ▣ 〈生活世界〉の「我々」が〈システム〉を利用するとの感覚回復
 - ▣ 〈システム〉に依存するとやがて使い捨ての部品に類落する

分かりやすく言えば、駄目な社会っていうのは「金の切れ目が縁の切れ目」じゃないけども、きずのない社会なんですね。そういうのは嫌だっていう感覚が広がっていったということがここに書いてあるわけです。

昔僕たちは共同体を営んでいて、そこに文明の利器が入ってきたり、大きな企業が入ってきたりするんです。あるいは例えばスーパーマーケットが入ってくるということでも構いません。あるいは電話が入ってくるでも構いません。僕たちが幸せになるから、便利になるからそういうテクノロジーを使う、システムを使うというふうになっていったんです。つまり、生活世界を生きる我々がシステムを使うという感覚。ところがこれが消えてきて、いつの間にかむしろ自分たちがシステムの道具になっている。システムの入替え可能なパーツになっているっていう感覚が非常に広がってきているんですね。それもつまり社会がクソだっていう感覚と表裏一体です。だから、やっぱり僕たちが必要だからシステムを使っているっていうスタンスに戻りたいなっていう感覚が出てきているということです。逆にシステムに依存しすぎると、僕たちは3.11の震災で既に体験しているように、用済みになれば捨てられる。東北がある種棄民の対象になっていますけれども、ここは後で詳しく言います。

中央に依存する、あるいはシステムに依存すると、要らなくなったらポイッと捨てられて終わります。増田レポートを真に受けると、ポイッと捨てられて終わるという結論にもつながるわけです。まさかこんなものを真に受ける人はいないと信じているわけですがそれでも。

地方回帰の若者たちが気づいていること②

- 「日本の社会はどのように空洞化したか」の教訓
 - ▣ 都市化と郊外化が標準的感情プログラムをインストール困難に
 - ▣ それが惹起する〈感情の劣化〉は民主政治を窮地に追遣る
- 「増田レポート&地方創生本部のデタラメ」の教訓
 - ▣ 中央行政への依存は中央行政に切り捨てられる運命を招く
 - ▣ 市場競争への依存は市場状況次第で構造的貧困化を招く

あと、これは僕たちの社会は、そういう駄目な状態にどういうふうにして墮落してきたのかっていうことについての歴史がありまして、それは後でお話をしますけれども、そうしたプロセスの中で昨今の政治にも関係していますね。話し合っただけ相手の考え方を変えてもらうとか、説得をするとかっていうこと

に対する期待を全くしていない。

今の安倍政権がそうですけれども、堂々と憲法改正をして正面から価値を訴える、国民に考え方を覚えてもらえばいいのにすり抜けなんですね。姑息なすり抜けを通じて目標を達成しようとしている。姑息なすり抜け政治、広告代理店を導入してさまざまなイメージ操作をし、話し合いをできるだけくくり避けて目標を達成しようとする。こういうのは政治学では非立憲的といいます。立憲制の制度の枠の中にいながら、立憲政治の精神を完全にないがしろにしているので、もはや立憲制の体をなしていないという考え方です。

実際憲法の枠の中で非立憲的な政治が行われると、かつてドイツで、戦間期にワイマール共和国が全権委任法を民主的に可決して、ヒトラーを誕生させたのと同じことが起こるというのが、僕たち政治学や社会学の人たちの共通の知識になっていますが、そういう問題が生じるわけです。つまり、こうした姑息なすり抜け政治が可能になっているのは、実際インターネット上で意見が対立している場合にもう話し合いができない。それは「ディスリ」、「ディスる」って言ってますよね。ディスリスpekトのことですけれども、けなすとかボロクソに、ぼろかすに言い合うというようなことしか起こらない。政治家の間でもそうなんですね。つまり、どんどん社会が駄目になってきて、政治が駄目になってきて、これから先どんどん駄目になるしかないです。なぜそうなるしかないかって言うと、日本以外の国も全部同じだからなんですね。日本は最もそれが進んでいますけれども、どのみち日本の後をほかの国は追うでしょう。

そういう政治の最も駄目な部分が現れているのが増田レポートと片やでの政治の現状なのです。この政治のでたらめが、こういう地方行政に対するさまざまな提案の中にもろに現れてきているんです。政治の劣化、市民の劣化も著しいんですが、当然官僚の劣化も著しく、後で言いますが、要は地方を落として下げて、自信がないんだったらおれたちの天下り先をつくれ、出向先をつくれというふうにして、中央の権益の拡張を地方に狙うっていう、そういうやり方をしてるだけの話なんです。昔からよく

あるパターンです。警察は何かというと法律の厳格化をしようとするでしょう。そうすると、企業や団体が不安になる。さらに、そうすると、だったら、心配なんだったらおれを天下りさせろというふうにして、天下り先の少ない警察が一生懸命天下り先、ポストをつくるっていうのと同じやり方をしているというだけの話です。しかしそれはそれとして、そうしたものが無防備に話題になってしまうような現状も非常に問題だと思います。

それで、まず、この最初の「社会の空洞化と若者たちの窮状」という話をさせていただきます。

□社会の空洞化と、若者たちの窮状

ニートというのは、もともとは教育・仕事・訓練に参加しない若者という意味です。イギリスで生まれた言葉です。世界中でこれは問題になっています。1990年代から問題になり始めました。もう20年以上問題になっています、日本を除いて、先進国標準のニート対策は。ニートは何によって生まれるのか。社会的排除によって生まれるという。したがって、社会的排除を社会的包摂に転換するのであるということなんです。

ニート問題という切り口

- ニートとは：教育・仕事・訓練に「参加しない若者」という意味
 - 各国(日本以外の欧州)で増大→ニート対策提案へ
 - ところが各国と日本で行政的図式が大きく異なる
- ニート対策のキーワード=社会的排除social exclusion
 - 英国政府(社会的排除局)の97年報告書に登場して有名に
 - 教育・仕事・訓練に「参加しない若者」という意味
 - 「貧困の悪循環の如き社会的排除の帰結」とされた
 - 「社会的排除の放置下では積極的は正措置も無効」
 - ゆえに欧州各国政府のニート対策=社会的包摂social inclusion
 - 97年EU基本条約(アムステルダム条約)&00年のニース条約に重要性明記
- 図式の特徴
 - not 個人を(社会に参加するように)政治&行政が支援せよ[日本]
 - but 社会を(包摂が回復するように)政治&行政が支援せよ[欧州]

排除と包摂がちょうど対になっているんですが、排除とは何かというと、例えば貧困の悪循環と言って、学歴がない、いい仕事に就けない、貧困にな

る、貧困な家庭を営む。そうすると、その子どもは貧困だからいい学校に行けない、学歴がない、いい仕事に就けない。こういう循環が回るのが貧困の悪循環なんです、これが社会的な排除の典型なんです。こうした悪循環がいろんなところで回っている。それが社会的排除が放出されている状態です。そのような状態では積極的は正措置、昔これを「アフーマティブ・アクション」と言いましたが、今はクオータ制と言います。少数民族あるいは女性のようなマイノリティな性別に一定の定員を初めから割り当てるというやり方。しかし、これも実際には有効に機能しないということは統計的にはっきりしているんです。

「社会的包摂」に関する誤った解釈

そこで社会的排除を社会的包摂に転換するためにどうするのかというと、社会を政治・行政が支援する。いいですか、日本はどうなっているかというと、日本によく見るニート対策は、個人を社会に参加するように政治や行政が支援するという、全くでたらめな図式です。これは全く意味がありません、緊急避難を除けば。国際標準の図式は、社会の包摂が回復するように、悪循環を断つように政治や行政がそれを支援するというものです。

このように言うと、きょとんとされるかもしれませんが、例えば日本では、ニート問題が社会の問題じゃなくて個人の問題、つまり怠業というふうになってます。怠け者なんだという議論になっているんです。これは国際標準から言うところとあり得ない。日本では、怠け者の状態から回復させるためにどうす

ればいいのか、どうやって動機づければいいのかみたいな、どうしようもないような話を今でもしている。

基本的に若い人が社会に参加したがるのは、社会がクソだからじゃないか。社会がもっと魅力のある、ふところの深いものになるべきなんじゃないか。そのことによって、「ああ、だったら社会に参加してみよう」と思うんじゃないかといったような発想が、日本にだけ全くないんですね。行政には全くないんです。同じように、行政の側だけでなく、行政の側に要求する側もやはり同じで、なぜ行政は個人を救済しないのかという図式にへばりつたままです。両方とも駄目、誤りだと書いてあります。問題は社会に魅力がない、社会に参加しても詮ない、そういう感覚を抱かせる、もう社会のたためぶりに関係がある。だから、社会に参加したくないのは個人の問題というよりも社会の問題なんだ。だから、望ましい社会や魅力ある社会をつくることでしか解決できない。

じゃあ望ましい社会や魅力ある社会はどういう社会なんだっていうふうな、その価値にかかわる議論をするところから実はニート問題は取っかかりが得られるわけですが、日本には全くそうした発想がないんですね。あまりにも貧しすぎる。この話がなぜ今日の「若者は地方へと向かうのか」みたいな話に何となくつながるのか、ということも直感していただけると思うんですが、ここから先はその実りある社会とかふところの深い社会はどういう社会なのかということに関する、過去40年ぐらいの学問的な提案について書かれています。

もともと新自由主義っていうのはそういう表現の一つだったんですが、今皆さんが知ってるような優勝劣敗ってタイプの弱肉強食っていう発想ではもとはなかったんです。ダグラス・ハードという男爵さんが、貴族ですけど、提案した非常に重要な政策で、キーワードは「能動的市民社会性（アクティブ・シティズンシップ）」。どういうことかというところ、さっき言った「いい社会だから参加しようと思う」、そういう感じなんです。自分が積極的に参加しようと思うようなそういう強い意欲、社会的包摂とは、そのような強い意欲を抱かせる、そういう力なんだということです。

日本における誤解の背景

- 日本では「社会の問題」でなく「個人の問題」として誤解
- 誤解の背景にある2つの要因
 - ①直前までフリーター論議が「怠業批判」として沸騰した
 - 行政の図式：怠業から回復させるための方法を探る→誤り
 - ②「近代社会として望ましいあり方」の観念が乏しすぎる
 - プレカリアート(不安定就労者)の要求：行政が個人を救済せよ！→誤り
- 「社会の問題=包摂問題」として理解しないと、解決しない
 - 社会に参加したくないのは「個人の問題」というより「社会の問題」
 - 「望ましい社会」「魅力ある社会」という価値抜きに日本の将来なし

従来の福祉国家は駄目だと。福祉国家を維持していると社会はどんどんクソになる。ないものねだり、あるいはねだれば何かくれる。何か自動販売機のようなものになってしまう。それでは駄目なんだということで、家族・地域・結社の相互扶助を国家からの社会の自立として擁護しようではないか。過保護国家はやめて、社会の包摂力を重視しようではないか。こういうことを言ったんです。

ところが、ダグラス・ハードの意図を利用したマーガレット・サッチャーは、これを駄目なものに変えてしまったんです。ハード男爵の言いたいことは「小さな政府と大きな社会」なんです。いいですか。政府を小さくして、その分社会的な相互扶助・きずな、そうしたものによって担保しようという話だったんですが、これが抜けちゃったんですね。「小さな政府」だけを強調して、資本の自由、簡単に言うと、賃金を上げなくてもいいし、労働条件を改善しなくてもいいし、雇用の流動化をどんどん進めてもいいっていうそういう方向性にいわねじ曲げてしまったんです。

新自由主義という処方箋の挫折

- 新自由主義は、提起者(ハード)においては市場原理主義ではない
 - 「小さな政府」の主張は「大きな社会」(包摂的社会)の主張と一体
- 元々は「能動的市民社会性を取り戻せ！」という主張
 - 能動的市民社会性: 地域・家族・結社の相互扶助による「大きな社会」へ
 - 今日の欧州は「社会的包摂」を能動的市民社会性として理解している
 - なぜなら、グローバル化の副作用を中和する数少ない手段だからだ
- サッチャー&メイジャー政権の大臣ダグラス・ハードによる提起
 - 地域・家族・結社の相互扶助を「国家からの社会の自立」として擁護した
 - 「過保護国家」を批判した: ①財政の逼迫、②社会的相続財産の空洞化
- だがサッチャーが「性別役割分業」擁護等に短絡し、今日の意味に頹落した
 - 「小さな政府」だけを強調、「大きな社会」を等閑視(後にギデنزが「第三の道」として復権)
 - 結果、「資本の自由(新自由主義)>個人の自由(古典的自由主義)」という発想へと墮落した

それで1回このハード男爵の新自由主義構想は挫折するんですが、それと全く同じものがやっぱり同じイギリスで90年代に出てくるわけです。それが「第三の道」っていう発想なんです。資料には「第三の道」ってことは書いてありませんが、ギデنزという社会学者がダグラス・ハードたちとほぼ同じ構想を「第三の道」ということで言いました。「第一の道」というのは福祉国家体制です。ダグラス・ハード男爵が批判したもの。2番目の道というのは、逆に新自由主義です。サッチャー流の新自由主義という、もう市場で全部やっていくんだという発想です。これ両方駄目だ。

「第三の道」っていうのがつまりさっきの「小さな政府と大きな社会」、社会的な包摂を持ってさまざまな便益を人々に利用可能にしていく。社会が今どんどんやせ細っているから、やせ細ってる社会をかつての共同体がそうであったような包摂力を持てるように支援していく。それが社会福祉国家から社会投資国家、つまり社会が分厚くなるように国家が支援する。インベスティゲーション、投資ですね。国家が個人を救うんじゃなくて、国家が個人を包摂する力を持てるように社会を支援するというプログラムが、つまりダグラス・ハードと同じプログラムが再びここで提唱されることになります。

実はこのギデنزという社会学者がブレインを務めていたブレア内閣のときに、先ほど冒頭に紹介したニート対策としての社会的包摂という概念が出てきました。ちなみに日本でも、民主党の社会的包摂プロジェクトチームっていうのがありましたけど、あれは僕が名称を事実上付けたものです。民主党は残念なことになってしまいましたが、社会的包摂っていう概念が一部皆さんの耳に届いたとすれば、こういうふうなプレゼンテーションを民主党に繰り返して繰り返してやった結果、民主党の一部の人たちが、「そうか、個人を国家が支援するんじゃなくて社会が個人を包摂できるよう、社会が個人を排除しないように社会を支援することなんだ。社会に力をつけてあげることなんだ。それが国家の役割なんだ」ということを理解していただけたということですね。

能動的市民社会性 & 社会投資国家

- 「能動的市民社会性」概念の、党派を超えた彫琢
 - デイビッド・グリーン: 保守党寄り
 - パーナード・クリック: 労働党寄り
- 社会学者アンソニー・ギデنزによる概念的完成
 - ギデنز: ブレア労働党政権の政策ブレイン
 - 政府の役割: 能動的市民社会性を支えること
- ブレア就任演説「1に教育、2に教育、3に教育」の意味
 - 「『大きな社会』の実現に向け、国家は社会に投資せよ」
 - ギデنزの標語: 「社会福祉国家」から「社会投資国家」へ
- EUの基本理念「補完性原理」とも整合する
 - 国家は社会を補完する装置であって、逆ではあり得ない(=補完性原理)
 - グローバル化に耐える「厚みある社会」を目指せとのEU共通了解と整合

「社会的包摂」の背後にある「価値」

次に、今申し上げたような政策的な対応の背後に

は、実は長い思想の蓄積があります。思想っていうのは、価値の体系です。価値の積み重ねがあるんです。どういう価値観に基づいて、政府は個人ではなくて社会を支援する、社会が個人を包摂できるように支援するという議論が出てきたのかっていう話をしようと思うのですが、僕は映画批評家とか演劇批評家でもあるので、そういう価値についてまず話します。

キーワードだけちょっと拾いますね。68年に学園闘争がどんどん先進国でも盛り上がったのですが、その学園闘争の非常に重要な動機づけは、もちろん社会が駄目だっていう問題もあるんだけど、このままこの社会にいて自分が幸せになれないんじゃないかっていう直感があったんです。それを「社会問題」よりも「実存問題」というふうに表現しています。

あともう一つ、この学園闘争の中で出てきた思想の代表的なものとして、ミシェル・フーコーという人が出していますが、「自由や主体的に見えるものも実はシステムが与える幻想にすぎない」という非常に重要なビジョンを出しております。

社会の空洞化に反応した「見せ掛け批判」

- 68年大学紛争の意味
 - 主題の多様性(反戦・管理体制・授業料...)
 - ⇒「社会問題」より「実存問題」を示唆
- フーコーのサルトル批判
 - サルトルの主体性賞揚／フーコーの主体性批判
 - 「自由や主体性に見えるものもシステムが与える幻想」
- 同型的な「見せかけ批判」の国際的噴出
 - 対外的:ソ連スターリン批判 & 中国文化大革命への、国際的連帯
 - 対内的:リベラル大学人や左翼知識人への批判(丸山眞男批判)

考えてみれば、僕たちが自己実現のイメージが自分の幸せのイメージで、自分自身の私的な体験を振り返って自分が本当に一番楽しかったこと、一番つまらなかったこと、そうしたものをいろいろ考えた末でそうだと。それがおれにとって幸せであるはずだというふうに考えたものであるはずがないですね、多くの場合は。そうではなくて、多くの場合はマスメージ、テレビコマーシャルとかテレビ番組、あるいは親が語るもっともらしい御託、そうしたものに影響されて、何の検証もないまま、経験等の対応もないまま、これが自分の幸せではないか、あるべき

未来ではないかというふうに信じ込んだりする。それはでたらめだよというのが、この「見せかけ批判」です。これは西側の国でも生じたし、東側の国でも生じたんだよということです。

このような見せかけ批判が生じた背景ですが、このことはもし映画が好きの方であれば、1965年の今村昌平監督『人間蒸発』っていう映画を思い出していただくと良いんです。これは当時話題になった、まさに人間蒸発についての映画です。60年代は高度経済成長時代ですね。50年代後半以降の所得倍増計画に基づいて日本は経済成長を遂げ、64年の東京オリンピックも大成功し、65年はビートルズが日本に來たりするわけですが、日本はもはや戦後ではないというか、西側の仲間入りをして優れた先進国になる。戦後復興や高度経済成長を遂げて、素晴らしいバラ色の郊外生活が展開しているはずであったにもかかわらず、そうではない。

『人間蒸発』っていうのは、当時、人々がうらやむ郊外の団地に住んでいる幸せそうな家族の主人、お父さんがですね突然いなくなってしまう。突然ある日いない、当時『人間蒸発』、あとお母さんについては「ルンルン売春」という言葉がはやっていました。「人間蒸発」と「ルンルン売春」です。つまり一見すると、見せかけ的には素晴らしい家族がそこにあるのだがふたを開けるとでたらめだよっていう、そういう感覚ですね。それがここに書いてあるわけです。

戦後復興や経済成長や、確かに都市化や郊外化が実現するのですが、それは期待外れだった。豊かで自由で主体的になったはずなのに幸せになれていないというふうな共通の感覚があった。こうした共通感覚を背景にして学園闘争もあった。もちろん学園闘争はすべての国で失敗に終わったわけですが、そこから僕たちはある種の経験値を、日本はもうずっと積んでいくわけです。

要は、見せかけにだまされないためにはどうすればいいんだろうかということ。その敏感さを養うためには、さっきも言ったことを繰り返しますが、生活世界を生きる我々のために、システムがあるはずなのが、いつの間にか生活世界も我々もシステムの生成物、システムの部品になってしまったんじゃない



いか。これはおかしいっていうことに対する気づきなんですね。その気づきがないと、実は敏感にはなれない。

世界というのは、善意と自発性が優位です。履歴が重要で、したがって名前が重要で、入れ替えできなく、だから流動性は低い。閉鎖的で計算可能性は低い。

「見せかけ批判」を支えた気づき

- 社会学的アノミー理論による説明
 - 68年頃の同時多発的「見せかけ」批判の、国際的共通背景は、アノミー
 - 戦後復興&経済成長(都市化&郊外化)がもたらした「期待外れ」
 - 「豊かで自由で主体的になったのに、幸せになれない」との共通感覚
 - かかる共通感覚ゆえの学園闘争(「ここではないどこか」への希求)
 - 「期待外れ」は、再帰性への気づき(主客逆転)をもたらし
 - 〈生活世界〉(を生きる「我々」)のために〈システム〉があるはずが...
 - 〈生活世界〉も「我々」も、〈システム〉の生成物へと類落していた
 - 再帰性＝選択の前提(自然・生活世界)もまた選択されたものに過ぎない事態
 - 例:「手付かずの自然」＝敢えて手を付けないという作為に過ぎない

もう一度それを詳しく言うと、システムと生活世界、これはユルゲン・ハーバマスっていう社会哲学者の概念です。システムというのは、役割とマニュアルが支配するコミュニケーションです。マニュアルに従って役割を演じられれば誰でもよいという入れ替え可能な、そういう世界です。例えば身元データをつくったとしても、それはクレームのためにあるだけで、別に個人として尊重されることが重要なわけじゃないんですね。匿名的で履歴非依存、マニュアルさえやれば入れ替え可能、高い流動性、開放的、計算可能。当たり前ですが、僕たちの知っているジョブマーケットですね、労働市場もどんどんこういう方向に行ってますよね。それに対して生活

〈システム〉と〈生活世界〉

- ユルゲン・ハーバマスの概念
 - 〈システム〉: 「役割&マニュアル」優位 (デニーズ的なもの)
 - 匿名的、履歴非依存、入替可能、高流動性、開放的、計算可能性
 - 〈生活世界〉: 「善意&自発性」優位 (地元商店的なもの)
 - 記名的、履歴依存、入替不能、低流動性、閉鎖的、低計算可能性
 - 近代化＝〈生活世界〉から〈システム〉への置き換え
 - マックス・ウェーバー: 近代化＝計算可能性(を支える手続化)の拡大
 - 近代化が進めば、「〈生活世界〉空洞化＝〈システム〉全域化」が進む

例えば僕だったら、これをよく「デニーズのシステム」という言い方をしますが、デニーズという、「ようこそデニーズへ」。やっぱり国際標準のあいさつで、別に歓迎してるわけじゃなくてマニュアルに入ってるだけの話です。地元商店的なものって違いますよね。これはどこの国でもそうです。一見さんなのか昔からの顔なじみなのかによって値段が違うわけです。あるいは「何であの人にあんだけかけて、私にまけないのよ」「分かった、持っつけ泥棒」とか言って、こういうのは計算不可能っていう。もちろんこれは映画のあるいはドラマの世界で描かれてきたものです。僕たちはそうした生活世界

を営みながら、時々、便利だからそういう場も利用する、あるいはシステムを利用するとなっていたのが、いつの間にか生活世界が空洞化してシステムだけになってしまった。こういうイメージです。

マックス・ウェーバーという人が、近代化っていうのは生活世界からシステムに置き換えられていく動きなんだっていうふうに考えた。計算不可能なものから計算可能なものに置き換えられていく。したがって、近代化が徹底的に進めば、どのみち生活世界が消えるっていうことがあらかじめ言われていたということになります。

このシステムと生活世界っていうことさえ分かっていたのであれば、もう大体ここはクリアできていると言って良いと思います。

ポストモダンという概念がどういうものか。モダンというのは、まだ生活世界というベースあるいはプラットフォームがあって、そこから手を伸ばして時々システムを利用するっていう感覚がまだ信じられてる時代。それに対して、ポストモダンというのは、もう生活世界がなくなってすべてがシステムのパーツ。生活世界、我々の抱くようなビジョンでさえも、システムが見せてくれるある種のイメージ、ビジョンにすぎないというふうに変わってしまった時代。それがポストモダンですね。システムが完全にすべてを覆い尽くしてしまったがゆえに、人間的であることとか生活世界そのままであるとかっていうイメージも全部、システムがつくり出してる映画のように僕たちに見せてくれているというふうに変わってしまったということです。

今言ったことをいろんな人が難しい言葉で言っているんです。自由や主体性はシステムの効果、あるいは生活世界はシステムの効果。つまりシステムが見せてくれるイメージ、あるいは自己はシステムによる生成物、こういうふうな議論が散々出てくることになります。ただ、自分たちが主体性だと思っているもの、これがほんとの私だと思っているものはすべてこしらえものだというのに気がつくことが、つまりこれがシステムの内部表現だよということについての気づきが、実は新しい反省の出发点になるんだよということです。同じようなことが、学問の世界だけじゃなくてアートの世界でも表現され

ていたということがあるわけです。

ポストモダン(後期近代)とは何か

- ポストモダン＝〈システム〉全域化＝〈生活世界〉空洞化
- ポストモダンの二つの意味——〔後期近代／近代の後〕
 - 後期近代：連続的な〈システム〉拡大の延長上に今があるとする思考
 - 近代の後：物の見方の断絶(再帰性への気づき＝主客逆転)に注目する思考
- 宮台用語〔近代過渡期(モダン)／近代成熟期(ポストモダン)〕は後者
 - 近代過渡期：〈生活世界〉を生きる「我々」のために〈システム〉がある
 - リオタールの「モダン＝大きな物語」＝〈システム〉の外にそれを選ぶ「我々」がいる
 - ハーバマスの「モダン＝正統性のある状態」＝どれも「我々」が選んだと言える
 - 近代成熟期：〈生活世界〉も「我々」の主体性も、〈システム〉の生成物
 - リオタールの「ポストモダン＝小さな物語林立」＝〈システム〉生成物の横並び化
 - ハーバマスの「ポストモダン＝正統性の危機」＝どれも「我々」が選んだと言えない

次に、少し歴史の話ですが、日本の社会がどのように空洞化したのかということ、ちょっとこれからお話をさせていただきたいと思います。今までのところでは、ニート問題を切り口にして、とりわけ日本で社会を捉える発想が非常に貧しい。国家と個人しかないんです。だから、国家が個人を支えるか支えないかみたいなことをやってるわけです。

〈システム〉とシステムの差異

- 〈システム〉も〈生活世界〉も、システムの内部表現(表象)
 - ハーバマスのルーマン批判：〈生活世界〉を無視するな
 - ルーマンのハーバマス批判：〈生活世界〉は表象に過ぎぬ
- だが内部表現だとの「気付き(の言説)」がポストモダンへの画期
 - 言説1＝フーコーのサルトル批判：「自由や主体性はシステムの効果」
 - 言説2＝ルーマンのハーバマス批判：「〈生活世界〉はシステムの効果」
 - 言説3＝ギデンズの自己ブーム批判：「自己はシステムによる生成物」
- 内部表現だとの「気付き」が、〈システム〉全域化(ポストモダン)に対応
 - 「主体性は見せかけ」⇔「〈生活世界〉は見せかけ」がポストモダンの認識
 - 以前は〈生活世界〉や主体性を信じられた＝〈システム〉全域化以前(モダン)

これもおかしいんですが、例えば統計的に日本だけ変なデータってあるんですよ。「政府は貧困家庭を支えるべきか」っていう質問に対して、ヨーロッパは大体8%～9%の人しかノーとは言いません。アメリカは新自由主義、市場原理主義の国なので、26%の人がノーと言います。「政府は貧困家庭を支

かかる経緯を踏まえぬ日本の出鱈目

- 国・自治体の勘違いを象徴する「自立支援」
 - 自立支援：就労支援＆職業訓練の充実＝単なる経済面
 - 「経済的に自立できればOK」はあり得ない
 - 社会的包摂の低下ゆえ、経済的つまり個人が破滅する
- マスコミや社会の勘違いを象徴する「格差批判」
 - 今後は永久に「小さな政府」しかないことを理解せねばならない
 - 「大きな政府」は永久に無理(福祉国家や公共事業国家に負けない)
 - 国家予算96兆、借金返済23兆、自治体配分16兆、社会保障32兆。
 - 税収40兆、毎年40兆円ずつ借金増大。
 - ならば「大きな社会」(社会的包摂)しかない…すなわち…
- 「個人の自立」から「社会の自立」へ
 - 「個人の自立」政策＝格差補完(再配分)→「緊急避難措置」
 - 「社会の自立」政策＝社会的包摂の回復→「恒久的目標」

えるべきか」、ノー。日本はなんと 34%の人がノーと言います。世界、もちろん先進国では圧倒的に最も高い数値です。なぜ日本だけが、政府が貧困家庭を助けちゃいけないというふうに言うんですか。それは日本人が社会という観念がない、愚かな人たちだからですね。

日本以外の国では、貧困は地域を破壊するものだというふうに理解されています。だから貧困を撲滅していくことは、個人を助けることじゃなくて、地域社会の空洞化をくいとどめることなんだと理解されています。だから地域の中で貧困が出てきたら、あるいは地域がそれをどうしようもなければ、国家が助ける。それによって地域社会の包摂性が保たれる。日本の場合は、貧困の家庭の支援という、国家が個人を支援するという貧しいイメージしかないもんだから、「何でおれがもらってないのにあいつがもらうんだ」って、浅ましくさもしいブーたれが蔓延するっていう、こういう状況なんです。

そうしたことに関するような話をニート問題を切り口にお話ししましたが、そして2番目は、そうしたヨーロッパには存在する価値観なんです、それはどういう学問的な理解に基づいて支えられてきているのかって話をしたんです。そこでシステムと生活世界という重要な概念を、皆さんにご理解をいただけたかと思います。

地域の空洞化の経緯

このような概念をベースにして、じゃあ日本はどういうふうにして生活世界が駄目になっていったのかということなんです、日本は非常に特異な近代化のプロセスをたどっているんです。冒頭に書いてあることなんです、日本の近代化は、地域共同体や学校を使って組み替えるところから出発した。明治5年、学制改革を下敷きにした自然村の行政村への置き換えをベースにした。つまり簡単に言うと、日本の近代化は自治、地域の自治をどんどん骨抜きし、空洞化させることによって達成したということです。

ところがヨーロッパやアメリカは全く逆に、ヨー

ロッパの場合だと中世自治都市、アメリカだったら新興共同体、そうしたある種の、僕たちは中間団体とか中間集団というふうに言いますが、そうしたどちらかというとも国家に反逆する自治都市や新興共同体をベースにした連携によって近代化を達成してきた、あるいは国家を達成してきてるんですが、日本は上からの近代化ですから、上からの近代化にとってノイズになるような自治、つまりこれはまさに電気抵抗みたいに感じられてしまうわけです。この抵抗をできるだけ骨抜きにするために、ありとあらゆる政策がとられてきたということになります。

日本での〈生活世界〉空洞化の経緯

- 日本の近代化は、地域共同体を学校を使って組み換えるところから出発
 - 明治5年学制改革を下敷きにした自然村の行政村への置き換え
- 続いて都市化による地域空洞化を埋め合わせる疑似共同体を構築した
 - 日露戦後の重工業化&都市化(兼石)によるアノミーと鬱蔓延⇒2つの埋合せ
 - (1)天皇共同体:崇高な精神共同体としての国体(明治20年代から)
 - 敗戦後、天皇の人間宣言で崩壊(三島由紀夫の指摘)
 - だが戦争体験共有と復興願望共有が戦後の国民共同体(国体代替物)を与えた
 - (2)会社共同体:終身雇用と年功序列の日本的経営(大正期or戦後初期)
 - バブル崩壊後、平成不況で崩壊
 - 会社への忠誠心はOECD加盟国中で最下位
 - 今日天皇共同体も会社共同体も失墜、地域空洞化を埋め合わせる装置は不在

続いて、そのような近代化を通じて地域の空洞化がますます進みます。そうすると人々は寂しくなります。じゃあ寂しくなった人々たちを崇高な精神共同体に吸収していくっていう、これがまず天皇共同体なんです。寂しい人々たちを天皇共同体に収納していく。これはドイツでも同じような動きがありました。もう一つは会社共同体です。地域共同体がどんどん駄目になっていくので、会社が疑似共同体の代わりをする。天皇共同体と会社共同体が、日本的な近代化において当然生じる地域の空洞化を埋め合わせてきたということになります。

しかし今日では、天皇共同体は自由を前に失墜していて、さらに三島由紀夫が自殺しちゃったわけですから、会社共同体も90年代後半、日本の平成不況の深刻化の流れの中ではや存在なくなってしまうんですね。もはやこれは今後も回復する可能性はありません。そうすると、地域空洞化を埋め合わせる装置はなくなってしまったということです。だから、どんどん地域はただただぼろぼろになってきて、人々が分断されていくということが起こるわけです。

都市化と郊外化による地域空洞化

- 天皇共同体の崩壊後、しばらく会社共同体が存続
 - 会社共同体は成年男子のもの
- 女子供若者は、辛うじて残った地域共同体に
 - だが会社共同体崩壊(平成不況)に先立ち、地域空洞化
- 地域空洞化＝都市化(日露～戦間期)＋郊外化(団地化／ニュータウン化)
 - (1)都市化アノミーによる「大正・昭和モダニズム」男(生産点)
 - 天皇共同体と会社共同体が空洞を埋めた(戦後からバブル崩壊まで会社共同体が残る)
 - (2a)郊外化アノミー(団地化)による「60年代アングラ」女子供若者(消費点)
 - (2b)郊外化アノミー(ニュータウン化)による「80年代テレクラ」女子供若者(消費点)
 - 代替は見つからず、「浮遊する身体」が出会い系やネットに溢れて現在に

これもアートの話なのですが、これだけ見ておきましょう。この地域の空洞化というのは、主に日露戦争あるいは戦間期に生じた都市化、あるいは重科学工業化と同じことです。重工業を支える都市労働者がまさに都市に住むという状態がそうなんです。知らない人と都市で隣り合って住むということが当たり前になっていく。これが戦後の郊外化、60年代の団地化と主に80年代のニュータウン化、これはコンビニ化というふうと呼んだりもしていますが、それによって地域の空洞化がどんどん進んでいったんです。

この辺は僕の十八番なので、僕の本を読んだことある方だったら、あああれのことかと思うようなその程度でよいです。

さて、ここで重要なのは、この団地化とニュータウン化の果たした役割をよく理解することなんです。もともと実は第1次の郊外化といいますが、これ60年代に広がった団地化というのは何だったのかというと、地域の空洞化を専業主婦が埋めていく。つまり地域の総合ビジョンによって調達していた便益を専業主婦が一手に担っていったという、その流れなんです。地域の空洞化と家族への内閉化、これが団地化ということです。

じゃあその後80年代に展開したニュータウン化とは何かというと、その専業主婦を中心とする家族が一挙に空洞化したので、主婦が担っていた便益が市場や行政によって埋め合わされていくという流れなんです。そのことをここではコンビニ化というふうに言っています。

82年～86年にかけて、コンビニエンスストアの軒数って倍近くに増えるんですね。82年という年は、日本全国でワンルームマンションの建設ラッ

シュが起こった時期です。チャリンコを乱雑に並べるとか、ごみ出しのルールを守らないとか、知らないのがうろちょろするとかっていうことで、大変な反対運動が盛り上がったんです。つまりコンビニ化の動きってというのは、ワンルーム化の動きと表裏一体です。

これでコンビニエンスストアが82年から盛り上がるわけですが、そこで売られていた代表的なものがレディスコミックと『投稿写真』なんですね。これ両方とも性的な媒体です。しかし、これは普通の年長女性向け漫画誌と表紙が変わらないから、ページを開かない限りエロ雑誌だと分からないし、『投稿写真』も表紙は『BOMB』のようなアイドル誌と同じですから、開かない限りエロ雑誌だということとは分からないわけです。しかし、これがコンビニでしか売れないらしいです。大々的に売れるようになったのは84年からなんです。

そして85年になりますとNTTが誕生するんですね。電電公社が解体されます。電話が買い切り制になって、多機能電話が出てきてコードレスホンがあつという間に普及します。そういう時期です。この85年という年は、セブンイレブンの最初のコマーシャル「ケイコさんのいなり寿司」篇、YouTube見れば出てますよ。夜中に黒電話の横のメモ用紙に「いなり寿司、いなり寿司」と何か脅迫的にメモリ始めた。メモをし始めて、ケイコさんとおぼしき女性がなぜか家を出てコンビニに飛び込んで、いなり寿司を買って「開いててよかった」って出てくるんです。こういうコマーシャルです。多分覚えてらっしゃる方多いでしょう。

このコマーシャルは衝撃的です。なぜかという、まず夜中に、家族もいるかもしれないのに、世間の目もあるかもしれないのに、いなり寿司を買いに行くなんていうのは昔はあり得なかった。大体、夜中にいなり寿司が食べたくなるということもあり得ない。何か欲望と関係性の巨大な変化が生じていったわけです。実際まさにそうなんです。コンビニでいなり寿司を買う。同時にレディスコミックや『投稿写真』を買っていく。広告にテレクラや伝言ダイヤルが出ている。ふと手元を見るとコードレスホンがあつて、ピッポッパツと電話をするとあつ

という間に男や女と出会えてセックスまでいけるっていう、そういう時代が85年から一挙に展開したんです。これがニュータウン化の歴史です。

2段階の郊外化による〈生活世界〉空洞化

- 第1次郊外化＝団地化(1960年代)
 - (1)地域空洞化 + (2)家族内閉化(専業主婦化)
- 第2次郊外化＝ニュータウン化(1980年代)
 - (1)家族空洞化 + (2)市場化&行政化(若年は第四空間化)
 - 第四空間化:家でも学校でも地域でもない場所へ
 - (1)仮想現実 (2)匿名メディア (3)匿名ストリート
 - モノの豊かさ→家族空洞化→日本的学校化→尊厳リソース不足→第四空間へ
 - ニュータウン化の歴史:82~86年の激変
 - コンビニ化→ワンルーム化→レディコミ&投稿写真→TV・電話の個室化
 - セブンイレブン広告「ケイコさんの福寿司編」(85)

面白いでしょ。団地化というのは、地域の空洞化を団地の主婦が埋めた。ニュータウン化というのは、その専業主婦が支えていた家族が空洞化して、それをコンビニが埋めた。若い人たちの場合には、家族のほかにこういういろんなメディアや場が埋めたということです。

先ほど申し上げた「包摂」というキーワードを思い出していただきたいんだけど、例えば世界で初めて始まった出会い系ネットワークがテレクラなんですけど、その当時から今日の状況は先取りされていた。一つ屋根の下にしながらそれぞれみんな別々のテレビを見ていた、その当時はまだ。ちょっと言いますと、84年にロヂャースとかダイクマといったロードサイドストアが全国的に展開します。そこで当時NIEs 諸国と言われていた国々の白黒テレビが、これ日本のOEMなんですけど、大体2万円台で買えるようになったんですね。それでテレビが一挙に個室化していった。僕の家もそうでした。

そうすると、家族がみんなで一緒に見ることを前提にした番組が消えていきます。まず消えたのはクイズ番組です。「タイムショック」とかクイズ番組、そうしたのがどんどんなくなっていきます。「アップダウンクイズ」とかいろいろありましたよね。全部なくなります。86年までになくなります。「ザ・ベストテン」も87年に終了です。歌謡番組もなくなった。何が出てきたかっていうと、クイズ番組については、深夜番組の「カノッサの屈辱」とか「カルトQ」とかっていうそういうタイプのカルト系クイズ番組が出てきます。音楽について

は「いかすバンド天国」とか、バンドブームに変わっていつてます。これも家族一緒に見れるものじゃなくて、教室の仲間たちがみんなで見るといふふうに変わっていくわけですね。

こんなふうにしてテレビは個室化した。電話も個室化した。一つ屋根の下にしながら、それぞれが別々のチャンネルを通じて別々の世界、別々の界限につながっている。したがって、一つ屋根の下の赤の他人というふうな状況が生まれていったということになります。

これは2段階の郊外化を通じた生活世界の空洞化ということです。

そうすると、かつてはまともだとされた感情をインストールされないのは当然というふうに言いましたが、これは先ほど冒頭にちょっと余談的に話した性愛のお話について言うと、例えば「俺たちの旅」とかという70年代の青春ドラマを見ると分かる。これは中村雅俊が主演でしたけれど、例えば好きな女の子に声をかける。振られると、必ずホームベースは男友達の仲間なんですね。「大丈夫、宮台、もっといい女がいるよ。あんな女クソだよ」とか、そういうふうにしてみんなで励まし合いながら、「おまえ、どうやって振られた? いやあ、そりゃあ間違ってたな。そんなやり方じゃ相手逃げるよ」。

そんなふうにながら、僕もそうですね、そうやってナンパの仕方、女の子と親しくなる仕方っていうのを教わるわけです。あるいは嫉妬もそうです。「好きだから嫉妬してんだよ。嫉妬ってのはやりすぎると関係壊しちゃうんだよ。だから、嫉妬はつらいかもしれないけどほどほどにするんだ」とかね。内容にはあまり意味がありません。内容ではなくて、そういうコミュニケーションがあった。

それは実は、どこの国でもそうなんですけど、性愛コミュニケーションの支えになるんですね。各個人が個別にバラバラにむき出しになってるような状態では、性愛のコミュニケーションというのはリスクキーで、ちょうどプールみたいなものです。人に無理やり背中押されてプールに落とされたりとか無理やり習わされたりしないと、人は泳がないですよ。性愛コミュニケーションもそうです。プール

とよく似ていて、「好きなようにしていいよ」っていったら乗り出さないんですよ。当たり前です。「好きなようにしていいよ」っていったら、プールへ永久に入れませんよ、私は。それと同じようなことが生じているんです。それがここに書いてあります。

そのような人間たちがコミュニケーションが希薄になったり、実社会は生きづらいなと思うようになったりするのは当然な流れです。社会を生きづらいのはスキルがないからということもあるし、社会はそういう希薄なものばかりが目につくということになるとやっぱりやる気が出ない。コミュニケーションする気も起きない、社会に参加する気も起きないという状態に必然的になるわけです。

空洞化の果てに出てきた「増田レポート」

日本の地域が空洞化していく歴史やプロセスを皆さんにご理解いただけたと思います。それを理解した人であれば、増田レポートみたいなものを真に受けるはずがないということで、でたらめなんだという話をさせていただきます。

増田レポートの主張は単純です。地方が生き残りたいなら、まず市場に適応せよ。つまり、これは競争せよということですね。それに自信がないなら、おれたちを受け入れろ。つまり出向役員ですけれども、中央に依存せよ。これだけなんです。要はシステムに組み込まれろ。市場のシステム、行政のシステムに組み込まれろ。そうじゃないなら死だよという脅しなんです。こんなの読めばすぐ分かる。

「地方創生」と対照的な若者の地方回帰

- 増田レの主張：地方が生き残りたいなら①市場に適応せよ・②中央に依存せよ
 - 要は「システム」に組み込まれよ、さもなくば死」との脅し
- 若者の地方回帰の背景にあるのは、増田レとは逆動き
 - 「システム」に組み込まれるのを良しとしない

最初に申し上げておきますが、昔の役人はもっと

頭が良かったので、こういう露骨なレポートは書かなかったですね。意図が明白だからです。今の役人はほんとに頭軽いですね、増田さんをはじめとして。だから、あまりにも頭が悪い役人たちが多いので、こういうレポートがそのまま出てくる。しかし、これにだまされてしまったらもっと頭が悪い。

若者の地方回帰の背景にあるのは、もう既に述べてきたことですが、増田レポートとは逆の動きですね。システムに組み込まれるのを良しとしない人たちが、地方に自分の居場所を見つけようという動きなんです。これがいかに妥当なのかっていうことは、役人たちが震災復興で行ったでたらめを見れば分かる。いいですか。

昨日のニュースですが、復興予算が何百億円も使われないまま放置されてるんですよ。すごいことですよね。これはなぜ起こってるのかというと、もともと津波被災地にかかわる復興構想会議というのがあって、従来の箱物をやめて減災をしようというソフト優先。とにかくこれは群馬大の片田敏孝先生の「津波でんでんこ」ですよ。何か箱物をつくるのではなくて、何か災害があったときにみんなでどのような行動をすればいいのかについて、行動規範を、あるいは癖を身につけていこうというそういうやり方。

震災復興で起こったデタラメ

- 津波被災地
 - 復興構想会議の「減災」(ソフト優先)から、中央防災会議「防災」(土木優先)への逆転
 - 土木優先による地域の暮らしの破壊 → 漁業権や営農権を資本に譲り渡す事態に
- 原発被害地
 - 帰還一本槍はチェルノブイリにもなかった愚挙
 - 科学の御都合主義的利用(年間20ミリシーベルト)
 - 加害者側が全てを決めていく構図
 - 背後にあるのは賠償問題

それが中央防災会議になると、なぜか減災優先だったのが、防災優先に逆転するんですね。防災を前提にした減災とかっていうでたらめな反転が起こるわけです。このような土木優先が行われる。土木に集中するから、まず人材払底してるでしょう。リソースが払底して、価格が高くなっちゃってる。だから、箱物建てられなくて予算余ってるんですよ。

だから、これは何で予算をさっさと使わないんだ

じゃなくて、出発点がここにある。役人たちが途中から減災を防災に変えたんです。コンクリートの箱物利権にかかわる、いろいろな利権の群がり先を確保するためのですね。そうした土木優先になると当然、どこの国でも、地域でもそうですが、地域の自立的な経済を主軸に回っていたのが、そのコンクリートの箱物を建てるっていうことからくる、土木に就業するっていうそういう形に変わる。地域の暮らしはどんどん破壊されていきます。

原発被災地はどうかというと、これはもうあまり言う必要もないけど、チェルノブイリのキエフ共和国ですね、当時のソビエトですけども、やり方から言うと、あまりにも日本は駄目なのがよく分かります。今でも帰還一辺倒です。しかも帰還しないで暮らしていく人たちをどう手当てするのかっていうことについても、もうすべてこれ加害者が勝手に決めていくっていう図式です。全くあり得ない。

旧ソビエトでは全く逆のやり方です。二度と帰還できないようにしたうえで多額の移転のための、移転と言っても強制移転なんですけどもね、そのためのリソースをすべて提供するっていうやり方。その代わり強制移転に従わないでその地域に帰った人間については、念書書かせて、何が起こっても自分の責任、そういう人間だけ帰れという、こういうやり方です。日本は、帰れ帰れ帰れ帰れ、帰らないやつには金出さない。何だ、これ。それはなぜかって言うと、賠償問題を避けるためなんだよね。

結局こういうのは全部霞ヶ関が背後にいまして、当初からの多様な意見を無視して、最初から決めてあるラインに誘導しようとする。そのために文言を検討する。だから防災よりも減災だったのが、防災を前提にした減災ということにして、いつの間にか

レポートの文言も順序が変えられているというふうなことであるとか、自治体担当者さえ知らない情報リーク、これは増田レポートのときも散々なされましたよね。こういうことによって、ある自明性がつくられていく。あるいはみんながもうしょうがないやっというふうにしてあきらめる、これは免疫化ですね。そうしたことがもう次々行われているわけです。

その結果、工夫すれば可能なはずの復興がことごとく頓挫する。その場合の可能なはずの復興というのは自治的な共同体の創生ですけど、それがことごとく粉碎されて、結局箱物と中央行政に依存した、そうした創生しかあり得ないというふうに変えられていってしまうわけです。

あと、僕にも中央省庁の役人の友だちがたくさんいますが、結局「お荷物を切り捨てないとポジションを保てない」というのが中央の官僚たちのゲームなんですね。今はそうでなくてもいつお荷物と判断されるかわからない、地方。だから、霞ヶ関の役人のゲームにのみ込まれてしまった瞬間、いずれ厳しさが出てくるということが確実なんです。

ここでは、スーザン・ジョージとウォーラステインという2人の名前が出ていますが、これは実は覚えといていい名前です。スーザン・ジョージは『世界の半分はなぜ飢えるのか』という有名な本を76年に出していますが、これは後進地域が市場システムの競争に早々に乗り出すと、最終的にはボロクソに負けて終わるよ、それが狙いだよっていう、そういう本を世界で初めて書いた人です。結局同じようなものをつくるような地方はたくさんあるので買ったたかれて、ああこれじゃあ駄目だ、元に戻ろうと思ってももうインフラが壊れているから戻れない。だから、市場というシステムに依存して、永久に貧困状態から脱却できない。それが構造的貧困問題ですね。

もう一人のウォーラステインによると、先進地域は後進地域の存在を前提に発展してきた。したがって、より後進地域を当てにできない後進地域は発展ができない。いいですか。つまり競争に勝てば上に行けるっていうのは、ウォーラステインによれば完全な幻想なんです。かつて先進地域がそうしたこと

デタラメの背後は霞が関

- 当初からの多様な意見を無視して、最初に決めたライン(財務・経産省)への誘導
 - 文言の顛倒による自明性の意図的変更
 - 自治体担当者さえ知らない情報リークによる免疫化
- 工夫すれば可能なはずの復興がことごとく頓挫
 - ここに政府の「地方創成」の典型図式が先取りされている！

増田レ・政府「地方創生」の勘違い

- 「地域間競争で地方衰退を解決する」は事態を悪化させる
 - 背景は構造的貧困問題(byスーザン・ジョージ):
 - 市場買い叩かれ→インフラ破壊で市場依存からの脱却不能
- 東京(霞が関含む)の視座: 自分らはこれだけ頑張ってるのにお前ら何やってんだ!
 - 背景は世界システム論問題(byウオーラスティン)
 - 先進地域は後進地域の存在を前提に発展→より後進地域を当てに出来ない後進地域は発展不能
- 「お荷物を切り捨てないとポジションを保てない」中央エリート
 - 今はそうでなくても、いつ「お荷物」と判断されるか分からない各地方

を、後進地域がやってしまったらもう終わりです。先進地域に買ったたかれて終わるんです。構造的貧困問題とつながっているんです。こうしたことは教養ある者にとっては常識です。

これはさっきの文言の逆転の話を書いてあります。

霞ヶ関の論理からの離脱を

もう一つ、世論の流れを意図的に形成する。増田レポートで「選択と集中」と言ったかと思うと、石破大臣が去年「自治体間競争に乗り出す必要がある」とかって言いました。あまりに不人気だからです。そう、皆さん地方の方々にはあまりにも懸命なので、増田レポートにだまされるとか、あんまり嫌だと思ったり、各地域でものすごい反発が起こったということもあって、石破さんは一生懸命。

僕もTBSラジオに石破さんをお呼びして、いい加減なことを言ってんじゃねえよみたいなことを言いましたけど、石破大臣にたくさんの秘書官がついてきて、宮台が何を聞くんだって事前に一生懸命根ほり葉ほり聞こうとするので、そんなものは番組が始まってみないと分からない。石破大臣ビビっていたかもしれません。そういう流れで、「陶太やむなし」みたいな流れがマスコミの中で去年のうちにつくられたでしょ。何なんだ、これ。ほんとにあり得ないような教養も経験の裏打ちもないような、いつも行われているゲームです。

中央がこれを行っている意図は何なのかっていうと、地方を競争に追い込み、敗北におびえる地域に中央勢力を送り込み、全資源を国家と資本が活用

地方創成会議(増田レ)から地方創生本部(政府)へ

- 増田レの公表時期を政府と打合せという日経記事
 - ウソについてヒトを動員する政治の常態化(安保法制)
- 地方創生本部「長期ビジョン」「総合戦略」の意図
 - 「ひと・まち・しごと」から「しごと・まち・ひと」への逆転(文言の顛倒!)
 - 地域で問題解決といいつつ分権に触れず、国からの人材派遣図式
 - PDCAサイクルの強要: 数値は自分で決めろ・達成度評価は中央が
- 世論の流れの意図的の形成
 - 選択と集中(増田)→自治体間競争(石破大臣)→淘汰やむなし(マスコミ)

し、そして地域の暮らしを破壊するということです。もうこれなんです。今までやってきたことです。これをまた繰り返そうとする新しいレポートが、しかし逆に内容は以前のまま、箱物行政、土木行政、全く同じですね、スタイルが違うだけ。コンパクトシティという言葉が出てきたりとかいろいろあるんだけど、結局同じ。こんなものを真に受けたら終わりですね。

「淘汰やむなし」と脅し上げる意図は?

- 地方ハイクレ施設(リニアコライダー、リニアモーター、最終処分場)誘致へ
 - 経産系の既得権益拡張図式そのもの
 - 農林水産業・学校・インフラ等地域の本来の課題に向き合うメニューなし
- 地方を競争に追い込み、敗北に怯える地域に中央勢力を送り込み、全資源を国家と資本が活用し、地域の暮らしを破壊する
 - 地域団体に金をちらつかせてパートナーにしてい
 - 地域団体が伝統農家を追い出しても「地元がしたこと」(自己決定!)
- かかる営みに「復興」「創成」と称してファンドを募り、補助金つける
 - 「お前たちには問題解決能力がないから、明け渡せ」が中央メッセージ
 - であれば「もう中央は頼らない」が妥当な選択にならざるを得ない

お前たちには問題解決能力がないから明け渡せというメッセージが中央から絶えずある。であれば、皆さんとしては、もう中央は頼らないというのが妥当な選択になります。中央の巨大システムを頼らなくても守れるような地域の自主的な経済圏であるとか、地域の包摂的な社会をどうやって存続させるのか、かつていうふうに考えたほうが、しよせん皆さん2025年問題って知ってると思うけど、日本の財政は早晚破綻しますから。あるいは破綻を避けるために、中央なんかには依存してたら大変なことになってしまう。

インターネット上どこを探しても、財務省を含めて国のどの省庁にしろあるいはどの投資ファンドも2025年以降の経済シミュレーションを一切してないでしょう。一切してないんですよ。それは業界で

言えば 2025 年問題と言われていて、もう駄目だというふうに考えられているからですね。だって、今だって毎年 40 数兆ずつ借金増えてるんだもんね。今年の予算だってもう 100 兆円近いんですよ。すごいことになってますね。

地方に向かう若者たちの「気づき」

最後、これはスーザン・ジョージが言ってきたことです。繰り返しますよ、大事です。100 万円で回る暮らしと 100 万円しかない暮らしって全然違います。前者 (a) は生活世界の自立、もう皆さんお分かりのように、中山間地で 200 万円を切るような所得で、それなりに楽しく暮らしている高齢者の多い村落とか、若い人たちも住んでいるような村落とか結構あります。ただ、マスメディア上になかなか載らないだけです。それに対して (b) 100 万円しかない暮らし、つまりこれは生活世界のシステムに依存している。システムによりうまく依存できてるかどうか、システムのよりいいポジションにコネくりできるかどうかによって、何だ 200 万円で暮らしてるやつ、500 万円で暮らしてるやつがいるのに 100 万円しかねえよ。

これはスーザン・ジョージによれば、こっち (a) に行くか、こっち (b) に行くかっていうのは、構造的貧困を回避するか、回避しないかの選択なんだということになるんですね。もしこの構造的貧困への道を選んでしまえば、最終的には回るものも回らなくなって中央財政に負担になります。例えば年金と相互扶助で回っていた限界集落を放棄すれば、これは増田レポートにある、地方中核都市に人

口集中してスラム化して、社会保障費がはね上がります。

ほんとには赤字でもいい。上層から下層への、中央から地方へのトリクルダウン、したたり落ちるものは高度成長時代にしか成り立たない図式です。逆にグローバル化と低成長が重なる先進国では、上層も中央もお荷物を捨てる競争をしないと生き残れません。だから、中央に依存すれば必ずいつかは切り捨てられるということになるわけです。

ということで、これ冒頭と同じことなんですが、若い人たちは今まで申し上げたようなさまざまなことを一部の方々が直感していると思います。金の切れ目が縁の切れ目になるような社会はやめようと。実りある社会にしたいなということですよ。あるいはシステムの入れ替え可能な部品であるような、そういう生活はやめたいなということですよ。あるいは日本のいわゆる共同体の空洞化に伴う感情の劣化の歴史には抗いたいなという、その流れに適應するのはやめたいなという感じ。あるいは中央行政、システムですけど、これに依存すればいずれ切り捨てられてしまう。あるいは競争なんて真に受けた日にはいずれ構造的貧困を招いて終わっちゃうよみたいな、そういう感覚が分かっておられるんだというふうに思うんです。

それでは、まだ時間があるので、さっきの冒頭の話に戻ります。

まず出会い系最大手ワクワクメールっていう会社があります。ワクワクメールの調査を 2013 年にしました。これは 25 ～ 26 歳の入会女性を学歴で 3 階層に分類して、グループインタビューをしました。高偏差値グループ、中偏差値グループ、低偏差値グループです。出身大学の偏差値です。これは収入と非常に高い相関があります。この中で誰が一番、どの層が一番幸せな性愛生活を送っているのか。まず消去法でいきます。低偏差値グループは余裕がありません。特に 200 万を切るような収入で暮らしている、これは男もそうなんですが、これは女性の調査です。疲弊していて孤独で、したがって、良い性愛を吟味する余裕がない。だから、出会い系サイトにとってはカモなんです、これ。吟味する力がない。そこをターゲットにしているわけです。

増田レ・地方創生本部を真に受けるな

- (a) 百万円でも回る暮らし ⇔ (b) 百万円しかない暮らし
 - (a)〈生活世界〉の自立 ⇔ (b)〈生活世界〉の〈システム〉依存
 - スーザン・ジョージ「構造的貧困」を回避するか、しないか、に相当
- (a)から(b)にシフトすれば、回るものも回らなくなり、結局は中央財政の負担に
 - 年金と相互扶助で回っていた限界集落を放棄すれば、地方中核都市に人口集中してスラム化し、社会保障費がはねあがる
- 上層から下層への・中央から地方への・トリクルダウンは、成長時代だからこそ成り立つ
 - グローバル化と低成長が重なる先進国では、上層も中央も「お荷物を捨てる競争」になる→中央に依存すればいずれは切り捨てられる立場に

□ 結論・若者の地方回帰に期待すべきこと

地方回帰の若者たちが気づいていること①

- 「社会の空洞化と、若者たちの窮状」の教訓
 - 社会的包摂のない社会は「カネの切れ目が縁の切れ目」
 - そうした社会は「社会を生きるのが稔りある」との感覚を喪失
- 「社会の空洞化への思想的対応」の教訓
 - 〈生活世界〉の「我々」が〈システム〉を利用するとの感覚回復
 - 〈システム〉に依存するとやがて使い捨ての部品に類落する

地方回帰の若者たちが気づいていること②

- 「日本の社会はどのように空洞化したか」の教訓
 - 都市化と郊外化が標準的感情プログラムをインストール困難に
 - それが惹起する〈感情の劣化〉は民主政治を窮地に追遣る
- 「増田レポート&地方創生本部のデタラメ」の教訓
 - 中央行政への依存は中央行政に切り捨てられる運命を招く
 - 市場競争への依存は市場状況次第で構造的貧困化を招く

それはもう出会い系のサイトの業者が全員そう言ってますから、間違いない。

じゃあ高偏差値グループ、中偏差値グループどうかっていうと、まともなのは中偏差値グループ。高偏差値グループは実は駄目なんですね。どうして駄目なのか。中偏差値グループはナンパ、コンパ系、要するに街コン、合コンでリアルコミュニケーションになじんでいるよということ。

それに対して、高偏差値グループはまず「彼氏いる率」が非常に低い。彼氏の意図も深くコミットしないで街コンにも行く。同性友人の承認可能性がない相手とは交際しない。つまり友だちが「えっ、そんな男と付き合ってるの」というふうに言いそうだと思います。付き合わないわけです。分かります？昔ならあり得ない。昔ならあり得ないです、これは。この10年ぐらいものすごい顕著になってきた

ことなんですね。

昔ならあり得ないってなったのは紆余曲折あるんだけど、90年代半ば、要は20年ぐらい前に結婚情報産業のOMMGが繰り返し調査をしていましたが、身長が高い、学歴が高い、収入が高い、三高狙いっていうのが90年代半ばに一挙に退潮して、一緒にいて楽しいかどうか、彼氏選び、結婚相手選びの基本だということになった。それでずっと続くのかと思いきや、この10年ぐらいで元へ戻っちゃったんですよ。また三高狙い。ただ、以前のように世間じゃなくて同性友人が承認してくれるかどうかという、すごい狭い世界・世間に話が変わった。それがビッチっていうんですね、今のキーワードなんです。

つまり年の差恋愛をしているとか、昔だったら三高ではない男との恋愛をしているとかということになると、ビッチだというふうに後ろ指を指されるんですね。そのことをすごく恐れるのが高偏差値グループ。この人間たちは何の経験も大してないくせに、恋愛はコストがかかるばかりで実りがないとかって言うてうなずき合ってるというふうな状態なんです。

僕の恋愛系の本にも書いてある「物格化」というキーワードがありますけれども、男同士の人間関係の中でもどうしてもこういう同性関係、ホモソーシャリティといいますが、女を物格化しがちです。女の子のホモソーシャリティだと男を物格化しがちなんですね。だから三高、承認可能性っていうときには、必ずそういう身分のようなものにちまたの注意が集中する。そんなのでいい恋愛関係どころか家族関係なんていうのは望めるはずもないでしょう。だからマッチングサービスなんていくらやっただって駄目なんです、基本的に。もう僕に言わせれば、性根が腐りきってるやつら、特に高偏差値グループにはめちゃくちゃ多いんですね。僕はもうたくさん見てきているので、間違いありませんよ。根拠もなく言ってるのではありません。

そういうような状況があるんですね。これはもちろんマスな規模の調査ですけれども、多くの若い人たちが、この社会はクソだな、こんなのに対応してろくなことはねえなあというふうに一部思うよう

になるということは当然のことなんですね。だからどう考えても、今、性の話だけに限って統計をお話しましたけれども、どんどん空洞化している。どんどん退却している。どんどん表面化している。あるいは物格化が進んでいるわけですね。これで都市生活に希望を、ロマンを抱く。どこに？一体どこにロマンを抱くんですか。

僕は世田谷区に住んでいますが、ラジオでしばしば世田谷区セレブ、二子玉川を差別するんです。どうしてかという、非常に上昇志向の強い楽天社員のもの、楽天本社があるんですけども、そういうことをラジオで平気で言ってます。僕は、クレームを僕につないだ瞬間にラジオをやめるっていうふうに宣言してるので、僕にはクレームは一切取りつがれません。多分多数のクレームが来てると思いますけどね。

その意味は簡単です。いいですか。子どもをいい学校、いい会社、いい人生みたいにたきつけてる連中っていうのは、こういう新住民的、それ「ニューリッチ」って言われます、新住民的成功者なんですよ。今、小売業をやってて、高級スーパーとかデパートが狙ってるのがこのニューリッチ層なんですね。それどころか受験産業が狙ってるのもこのニューリッチ層です。さもない物格化層です、僕に言わせると。分かりやすく言うとうすね、このようなものに適応して、彼らの言う成功というものをし何がいいの？寂しく一人で死ぬぜ、になります。僕に言わせると。

だから、そんなのは駄目なんですよ。そういうのは駄目だということを理解するチャンスがある若い人と、チャンスがない若い人っていう区別があるかなと思います。例えば高偏差値の女のグループを出しましたけれども、同性友人関係の中に埋没している限りそういうチャンスは全くないわけです。昔と違って異年齢集団、異なる年齢集団の間の上下関係が非常に乏しくなっている、そんなんでまともな相手見つかるはずないじゃんって誰も言わないんです。そんなんでまともな結婚できるはずないじゃんって誰も言わないんです。だから修正されないうで永久に真っ直ぐ進むんです。

これが世田谷東部に住んでいる僕がいろんな人た

ちをインタビューしたり統計調査をしたりして、浮かび上がってくる像です。なので、これははっきり言って七面倒くさい学問的な蓄積をベースにして、若者の地方回帰は妥当な方向なんだというふうに申しましたけれども、こんな七面倒くさい中味を全部すっ飛ばして、僕が今見ているものを皆さんにお話しするだけでも、実は同じことを伝えることができます。しかし、今日はちゃんとした話をしてと思います、学者として。

私のよく知っている社会的包摂の政策の流れ、あるいはそれを支える思想や哲学の流れ、あるいはそれを無視した日本のある種の地域空洞化の流れ、その果てに出てきた増田レポート的なもの、というふうな形で、今日は話を進めさせていただきました。ありがとうございました。

3 パネルディスカッション

パネラー 宮台 真司 氏
イケダ ハヤト 氏 (プロブロッガー)
吉村 沙貴 氏 (高知県立大学文化学部)
コーディネーター 東森 歩 氏
(ファン度レイジングマーケティング代表・
高知県自治研究センター理事)



(司会)

それでは、第2部のパネルディスカッションに移りたいと思います。

私のほうから、簡単に皆さんのご紹介を最初にさせていただきます。

最初にパネラーですけれども、まずイケダハヤトさんです。もう多くの皆さんご存じだとは思いますが、プロのブロガーの方で、昨年、東京から高知に移住されてきて、この7月から本山町に住民票を移したということで、奥さんそれから子どもさん、もうすぐ二人目の子どもさんも生まれる予定だそうです。今出てますけども『まだ東京で消耗してるの?』という非常に挑発的な、刺激的なブログを連載されている方です。

続きまして、吉村沙貴さんです。高知県立大学文化学部の4回生の方でして、香美市の方ですけども、イケダさんとは対照的に、地元の高校そして地元の大学を出て、地元の企業に就職が内定がされているということで、都市へ出ていかずにずっと地元で働いて自分の夢を実現させたいという熱い思いを持たれてる方です。

そして先ほど講演いただいた宮台先生にも引き続きご参加をいただくということで、よろしくお願いします。

そしてコーディネーターですけれども、当センターの理事でもあり、ファン度レイジングマーケティング代表の東森歩さんです。

そしたら、以下の進行はコーディネーターの東森さんにお任せしたいと思います。よろしくお願いします

ます。



(東森)

ご紹介いただきましたファン度レイジングマーケティングの代表をしております東森と申します。つたない進行になるかもしれませんが、どうぞこれよりお付き合いをいただけたらと思います。

実は私には子どもが3人いまして、一番上の長男がちょうど高校3年生で、中学校から高校生に進学するときも一つの進路の分岐点だったんですけども、これは恐らく高知県内のもう大多数の中学3年生は県外に進学するというのは、恐らく数%。ほとんどの方が県内の高校に進学するわけですが、初めて高校3年生の進路に立った今、親の心境として、わが子にどのようなアドバイスをすればいいのか。先ほど宮台先生が「親の御託」っていうのもありましたけども、今私、息子にできるだけ関わろうとしているんですが、御託なのかもしれませんし、適切なアドバイスができてるのかなどかなと思ひながら、今日のその「若者はなぜ地方へと向かうのか」というテーマを考えてみたいと思います。

現在、私の息子は地方にいて、県外進学をするのかあるいは県内に進学をするのか、はたまた就職をするのか。こういういろんな分岐点に、親子ともども今直面しているところです。前段の宮台先生の講

演の中からもたくさんのキーワードをいただきました。もしかすると、今夜もう早速帰って息子に御託的に語るかもしれませんし、一緒に考えてみたいなと思っております。皆様もそれぞれ置かれている立場の中で、もしかするときょう前半の講演あるいは後半のこのパネルディスカッションの中から、何かヒントをつかんでいただけたらいいのかなと思っております。

ということで、コーディネーターの役割としてはうまく進行していきたいなということがあります。

それで、まず一番最初にイケダハヤトさん、私も昨年、1年ちょっと前ですけども、去年の春に初めてお会いしまして、それから1年半ほど活動と一緒にさせていただいてますが、まさかこんなに濃密に、毎週とはいいませんけども2週間に1回ぐらいはお会いをしてまして、土佐志民大学という、皆さんもちょっと聞かれたことがあるかもしれませんが、私が担当しておりますNPO 高知市民会議が昨年コミュニティ・カレッジという、志民による志民のための志民大学、この志民というのは「志」「民」ですね、何か自分の地域を変えたいなとか、自分の思っていることを実現したいなという市民の皆さんが学ぶ場をイケダハヤトさんと一緒に立ち上げまして、これが今、年4回シンポジウムをしながら進行をしているところでございます。

そういうことで、会場の方は、イケダハヤトさんと私とセットでご覧になられた方もたくさんいらっしゃるかと思います。そんなイケダハヤトさん。初めての方もいらっしゃるかと思いますので、自己紹介をしていただければ。



(イケダ)

宮台先生の話聞きながら資料作ったので、資料を写しながら話そうかなと思います。

僕はちょっと特殊な仕事をしていて、ブログを書いています。いろいろ

ほかにもやってるんですが、基本はもうずっとブログを書いて、これで生活しています。ほかに本を書

いたり、あとはテレビのコメンテーターとかいろんな仕事をしていました。もともとNPO活動にすごく関心があって、NPOの方々の寄付を集める方法だったりPR、記者の人との付き合い方みたいな、あとはブログを使ってどうやって情報発信をするかというところのアドバイスをずっとしていたので、今は高知でもそういうような方々の支援ということをやっと、ボランティアでやっていたりとか。

あとは非営利のメディア、先ほど「社会的包摂」という非常に重要なキーワードが出てきたんですけど、これはイギリス発で社会的包摂をある意味ビジネスで実現しようとしている人たちの日本版『ビッグイシュー』という雑誌があるんですね。ロンドン発でホームレスの人たちが販売している雑誌があるんです。日本だと11年かな、11年経ちまして、これを主に都市部、今確か11都市ぐらいで販売して、高知では残念ながら売ってないんですが、東京だったり大阪だったら売っていて、ホームレスの方々が雑誌を売っています。

350円の雑誌を買っていただけると、彼らに180円お金が入っていくと。人によっては毎月7〜8万円のお金を手に入れられるので、それをきっかけに、新しい社会とつながり直す。『ビッグイシュー』の側でももちろん生活保護につないだりとかいろんな仕事をしてくれるので、ホームレスの方々、路上にいる方々をうまくビジネスのほうに引っ張っていったって、それでしっかり何らかの形で関わってもらっているところを、雑誌という形でやってる人たちがいるんですね。

僕はこちらのオンライン版、『『ビッグイシュー』オンライン』というのがあります。こちらの編集長もやっていて、こちらの構成だったり記事を集める仕事なんかもしているの、何しろ今日の話ですごく社会的包摂という非常にいいキーワードが出て、僕は『『ビッグイシュー』オンライン』でまさにそういうことをしていて、非常に面白い話だと聞いていました。

何しろうちのサイトは今大体月間で言うと、77万人ぐらいの方たちが読んでくださっています。なので、このくらいあると全然飯が食えるんですね。

ブログって何か、人によってはもしかしたらお遊び
というか、片手間でやるようなイメージを持つかも
しれませんが、マスメディアとまでは言わないん
ですけど、一個人のブログでも 100 万人ぐらいの
方が読んでくれるサイトは全然つくれます。僕は
そういう意味で言うと、まだ中堅ぐらいの規模だ
と思います。もっともっと上の世界の人たちがい
るので。僕は月間で 80 万人弱の人が毎月読んでく
れるサイトというのをやっています。雑誌で言っ
たら 80 万部、雑誌とそのまま比較するのはあれなん
ですけど、まあ 80 万人の人が読んでくれればお金
にはなりますよね。これをずっともう 3 年ぐらいで
すかね、プロブロガーとしてブログを更新していま
す。

話が変わりますが、現在は本山町に住んでいます。
本山町の大石という場所で町営住宅があるんです
ね。クライנגルテンという超すてきな町営住宅が
あるんですよ。ここはほんとに素晴らしくて、僕ら
はもう一目惚れして移住しました。その前は高知市
内の万々というところに大体 1 年ぐらい、万々もす
ごくいい場所だったんで離れるのもどうかなと思っ
たんですけど、こちらに来たらほんとに良かったの
で、今はうちの妻と娘と 3 人で住んでいます。携帯
の電波も入らないようなところですし、結構道も荒
いので、都市生活をしていた人間からするとちょっ
とカルチャーショックもあるんですけど、楽しく暮
らしています。

すごく棚田がきれいなエリアで、今僕らの住んで
いるところは標高で 500 メートルぐらいですかね、
すごく涼しいです。きのうの夜はほんとに寒いぐら
いでした。途中で寒くて起きちゃいました。昼間も
やっぱり非常に涼しくて、楽しく暮らしていると。

いろんな論点があると思っていますですね。さっ
き宮台先生のほうから概ね話していただいたんで
すよ。もう僕もそういうことです。ちょっと違う観
点で言うとですね、僕一応個人事業主でビジネスを
やってるんですね。なので、僕は自分を結構ビジネ
スマンだと思っていますし、実際ビジネスマンで
す。なので、そういう観点から言うと、結構高知っ
てビジネスの関係からいうと面白いなと思って移住
してきたというところもあるわけですね。

移住して 1 年で、うちの事業の数字を出すと、読
者数はもう倍になっています。やっぱり東京でずっ
と書いていたんですけど、東京で書いてることっ
てほかのライターも書くんですね。東京にはたくさ
ん人がいるじゃないですか。なので、書き手もたく
さんいるんです。でも、高知に来ると書く人がいな
いわけですよ。そしたら当然読まれやすいわけだ
すよ。ほんとに希少性、需要と供給の問題があっ
て、僕が提供する情報っていうのは希少性が高くな
るわけですね、ここに移動するだけで。なので、情
報の価値が高まって読者数も増えました。読者数が
増えれば売り上げも当然増えます。これはほんとに
新聞とか雑誌と全く同じ話です。ですから、ブログ
の事業自体も 1 年で 1,500 万ぐらいの年商規模に
なりましたし、今スタッフを増やして今のところは
3 名、来年は 2,000 万ぐらいの規模にしたいので
恐らく 4〜5 名ぐらいですかね、高知の山の中に
ちょっと若者をどーんと引き連れて、どんどん情報
発信をしていくようなビジネスをつくっていこうか
なと思ったりしています。

何でしょう、何で僕が今この話をしているかとい
うと、意外とこういう話というのはあまり語られな
いような気もちょっとするんですよ。移住ってこ
う、都市の喧噪から逃れてきて豊かに暮らしましょ
うという、それはすごいほんとに同意で、僕もそう
やって暮らしているんですけど、意外とビジネスか
ら見てすごく合理性があるんじゃないかと。コスト
カットで見ても、東京はほんとに家賃が高いんで家
賃がもう 3 分の 1 ぐらいになりましたし、交通費も
下がりました。東京は結構交通費かかるんですが、
僕仕事でほんと毎日のように多摩市という郊外から
都心に出ていたんで、1 日交通費が 1,000 円超え
ることは全然珍しくないです。そういう暮らしをし
ていたことを考えると、今は全然逆に交通費は安く
なっていったと。あとは水道・光熱費も、今僕住ん
でるところは結構涼しいのでクーラー使わなくて
も、あとは水道代が何かうちのあたりはただだつた
りとか、いろいろあって水道・光熱費も下がった。
コストカットの効果もあった。売り上げが増えてコ
ストカットができて、これほんとにビジネス的にい
いと。



なので、面白いと思うのは、先ほどの宮台先生の話はすごく刺激的で、僕は今何でこういう場所にいるのかなと思ったときに、やっぱり社会が今すごくデジタルになってきていて、僕はほんとに基本的にデジタルでお金を稼いでいます。実際に何かを売るということは、こうやって皆様にお話しするという仕事はたまにしますけど、こういうものはほんとに収入で見たら1%以下ぐらいですね、ほとんどがインターネットのブログなので、パソコンがあればどこでも生きていけます。

じゃあお客さんはどこにいるかというと、それこそグーグル、アメリカに本社を持つグーグルからお金をもらっていたり、アマゾンからお金をもらっていたり、あとはもちろん国内の東京の会社からお金をもらっていたり、高知の会社からお金をもらっている仕事もちろんあるんですけど、やっぱりそれはもう収入の恐らく2~3%かそのくらいだと思います。

それを僕は本山町の山の中でやってます。大石地区は人口200人でいわゆる限界集落です。限界集落に住んでビジネスをしていると。それはやっぱりデジタルと、あとブロガーですよ。そういうことができる時代に今なってるので、やっぱり都市でやるよりも僕は地方のほうが合理的だと思うんです

ね、ビジネス的に。ちょっと違和感がある響きかもしれませんが、僕自身ビジネスが実際伸びていて、ビジネスのジャンルによっては全然やっぱり収益性が高まったり、面白いものがどんどんつくれるというところは可能性として非常に面白いかなと思っていたりして、こんな話は何かあんまり語られてないような気がするのでもっと強調して書いています。

なので、これから僕がさっきも宮台先生の話聞きながら思ったのは、どちらかと言うと今まで都市中心に経済社会システムがつくられてきていて、そこはやっぱりお金の問題なんですよ。たくさん人がいてたくさんお金が回って、当然そういうところを中心に社会がつくられています。それはそうなんですけど、これからは意外とそうでもないんじゃないかと。もっと地方でもお金が稼げる。うまく外貨を稼ぐような人たち、人を流通させるような人たちっていうのは多分絶対出てくるはずなので、そう考えると今までできてこなかったような社会とか増えたりすると、意外と高知の限界集落なんかでつくれるんじゃないかということをちょっとワクワクしながら考えています。

具体的なビジョンとか具体的な価値観というのはよく分からないまま今やってる感じなんですけど、

すごく僕はこちらに来て、本山町に来て2週間ぐらいですかね、すごく刺激的な感じがします。やっぱり高知市内はほんとにすごく便利な地方都市で、多分地方都市の中でも非常に利便性が高い場所だと思います。僕は東京の多摩市というところにいましたけど、多摩市より100倍ぐらいいいですね。すごい便利で、しかもすごい楽しいです。多摩市関係の人がいたらすいません。でも、多摩市はほんとに、うん、微妙な町でした。あれから比べれば、ほんとに高知市はある意味都会なんですよ。

それは僕ら移住者にとっては、人によっては面白く、僕はもともと東京にいたんでね。高知市はすごく便利で楽しいんですけど、それが何かある種東京的、でももっと限界集落に行くとそこはまた違う社会経済システムが回っていて、それをアップデートしたり何かうまくなじみ、僕らが学んでいくようなところって、やっぱり田舎のほうがあるんですよ。そこが今後20年30年ぐらいで新しいシステムというのができてきて、それはほんとにもっと人間的で社会的包摂というのを前提として、ちゃんと人が生きていけるものってのをつくれたら面白いなということを考えている次第なんですよ。

今日のお話に戻って、最後、簡単な結論を言うと、やっぱり今感じてることとして言うのは特に子育てです。僕らも高知に移住してきたのは、直接的にはやっぱり子育てが原因です。都会で保育園に入れようとしたんですけども、すごい簡単に言うと保育園に入れられませんでした。いわゆる待機児童問題ですね。基本、保育園に入れることができてっていう人たちが今やっぱりすごい増えてます。選ばなければ子どもは保育園に入れられるんですけど、さすがに選びたいわけですよ。選びたいと思ったら、じゃあ教育環境を選びましょうと言ったとき、やっぱりフリーな仕事のほうがいいわけですよ。僕は幸い仕事もインターネットでやっていたので、そのまま仕事を持ってきて高知で働くことができたので、やっぱり子育て、逆に言うと、子どもが生まれなければそのままもう東京にいた可能性があります。

やっぱりそれは僕と同世代、東京にいる30代～40代前半ぐらいで子育てをしていたり、第2子、

第3子を授かってっていうときになると、すごく具体的な問題として東京が立ち上がってくるんですよ。子育てができないと。じゃあどうしようか、地方に行こうかということを考える人たちがすごく増えています。言葉で言うと、「ノマドワーカー」という言葉がよくインターネットで言うんですけど、どこでも自由に仕事ができる人、「ノマド」は遊牧民ですね、遊牧民といえば僕らですね、遊牧民のようにどこでも自由に仕事ができる、場所と時間にとらわれないようなタイプの職業を選んでいるような人たちってというのは、やっぱり東京を中心に増えています。僕の友人でもたくさんいます、ほんとに、インターネット中心で仕事をしている人は。

なので、そういう子育て中の人たちが、これからどんどん移動してくると思います。それはほんとに分かりやすい出来事で、やっぱり東京で子育てはできません。僕らと同じです。東京で子育てができないので、仕事を持ってきたりとか、あとは思い切って仕事がない状態に来て、こっちで仕事をつくる。そのために僕らが当然仕事を提供するというところをちゃんとつくっていかないといけないんでしょうけど、これからまたそういう人口の流れというのがどんどんできてくるので、これをどんどん加速しないとイケないなと。さっきの宮台先生の話聞いて、そんなことを思いました。

ということで、簡単な自己紹介ということで終わります。

(東森)

ありがとうございます。今日の私の役割どころとしては、皆さんの質疑応答、後ほど紹介をさせていただくんですけども、この間でも随時皆さんが感じてらっしゃることをイケダさんなりパネラーの皆さんに投げっていくということが私の役割かなとも思ってますが、イケダさんが高知に去年引っ越ししてくるときにですね、東京から、「僕は高知に引っ越したほうが年収が上がる」というふうにブログ上断言されてたんですよ。

(イケダ)

しました。

(東森)

私は、今南国市に家があって高知で仕事をしてます。高知に住んでる人間としては、高知で年収が上がるなんて何して上がるんですかっていう、上がりようがない。私現在 43 歳なんですけども、普通に会社勤めしてれば、定期昇給なりで給料がそれなりに緩やかな階段で上がっていく。そういう上がるという意味ではなくて、イケダさんの場合は倍増するぐらいの勢いでおっしゃられたんですね、1 年ちょっと前に。それに非常に刺激を受けたというか、びっくりした。今スクリーンを見ると、現実上がってましたよね。

(イケダ)

そうですね。

(東森)

これがやっぱり、有言実行というのもあるんですけども、高知でできるポテンシャルというのはまだまだあるんだなっていうのを感じました。

では続きまして、イケダさんの右側、皆さんからは左側にお座りいただいております高知県立大学文化学部吉村さん、吉村沙貴さんですね、自己紹介を、いきなりなんですけどもお願いしてもよろしいでしょうか。



(吉村)

皆さん、初めまして。
高知県立大学の文化学部
4 回生の吉村沙貴と申します。本日はよろしくお願いします。

私は高知生まれで香美市に現在も住んでいまして、小・中・高と地元の学校で育ちました。大学で初めて出てきたと言っても市内なんですけど、汽車通をして通っています。大学では、中山間地域の活性化について学んでおりまして、活動拠点として主に香美市の土佐山田町平山地区と高岡郡佐川町尾川地区の二つを拠点にして活動をしています。主にどんなことをしているのかと

言いますと、一度途絶えていた地域行事の復活だったり、あとはイベントの復活・運営・保存、それから集落調査などをこれまで行ってきました。

それから先ほども少しご紹介がありましたが、就職先が地元のスーパーマーケットに内定をいただきまして、もうこれからは地元に入ってお仕事をすることになって決まっております。

本日は若者代表ということで立たしてもらっているので、少しでも何か思いをくみ取ってくださったらいいなと思っております。よろしくお願いします。

(東森)

ありがとうございます。ということで、吉村さんご自身もおっしゃられてましたけども若者代表、そして、吉村さんは大学の進路の分岐点に立ってて、今おっしゃられたように地元の企業に就職することに内定をいただいているということで、このあたりのプロセスですね、なぜ吉村さんが地元の企業を選んだのか。そしてその元をたざせば、県内の大学に進学したのはなぜなのかというようなことを、この後少しずつ聞き出していきたいなと思っておりますので、よろしくお願いします。

宮台先生、宮台先生は自己紹介は先ほどの講演でしていただいていますけども、先ほど打ち合わせのときにお聞きしますと、先生これで高知は 4 回目……。



(宮台)

5 回目です。

(東森)

5 回目ということで、地方でいろんなお仕事で行かれて、恐らくシンポジウムとか講演のたぐいのものの中では、高知が最多回数を誇っていることだそうできて、結構だから高知人気があるわけですね。宮台真司先生ファンが隠れているのか、あるいは、そう TBS のラジオって高知でも聞けるんですか。



(宮台)

聞けないと思います。

Podcast でなら聞けます。

(東森)

Podcast で聞けるそうです。ということは、リスナーの方もいらっしゃるんじゃないのかなと思いますが、先生これまでに4回、今回5回目来られて、滞在時間はそんなに1回あたりは長くないのかもしれませんが、高知の印象とか、観光地とか、中山間地域に行ったときの何かエピソードとか、何か高知で思い出というところとちょっとふわとした感じなんですけど、印象に残ったエピソードとか何かそういうものがあれば、自己紹介というところとちょっとあれなんですけど、そんな感じでお話いただけたらと思います。

(宮台)

できるだけ短くお話をすると、僕をお呼びいただくということ自体が非常にリスクなことなので、5回も呼んでいただけるということは、高知の方々はリスクなことを平気でやるんだということですよね(笑)。古くはやっぱり漁師文化圏に属するということがあるんだと思うんですが、共同集団作業

をやるというよりも自分でリスクを取りに行った人間のほうがたくさん量を、山であれ海であれ、量(漁)が取れるという。そういう漁師文化圏は当然のことながら、いわゆる共同で集団作業をするタイプの村落共同体のような、あるいは同調圧力に負けやすい、空気に流されやすいとかっていうことからやっぱり自由ですね。

そういうふうに柳田國男なんかは説明していますが、けれども、やっぱり高知の人は自由だと思います。とりわけ教育関係でイベント、学校の先生などの集まりに呼ばれると、隣の愛媛県ですと、まず僕が何を言うのかっていうことで事前チェックが非常に厳しいっていうこともありますし、終わった後も何て言うんでしょう、非常に皆気を使ってコミュニケーションするんですね。高知はもう何度来てももう無礼講ですからみたいな感じでして、校長先生、教頭先生あるいはほかの先生方、職員がごちゃごちゃになって、敬語も使わずに平気なことを言ってるみたいな感じが、僕はすごく好きです。こういう場所が日本にあるのかと。

あと、よさこい。祭りが好きなので、全国の祭りを取材していた時期もあるんですが、よさこい祭りがあまりにもモダンなのでびっくりしたんですけど、これ10数年前に来たことあるんですけども、

もう踊りもよさこいが2小節と鳴子を使っていればいいよみたいなことでしょう。スタイリッシュだし、作曲も振り付けも東京の有名な人にやってもらってるよみたいなところがたくさんあったりして、東京との距離感がほかの地域とちょっと違うなというような感じはしますが。

何ていうんでしょう、さっきもちょっと吉村さんとお話をさせていただいたんだけど、何か大阪とか関西の話が高知の人から出てくることがあまりないっていう、それが特徴だなっていうことには当初から気がついていました。だからその意味ではかなり独自の地域文化を持つ場所だなと思い、その独自性の向いてる方向は、日本が陥りがちな悪い心の習慣から自由であり得るという意味では、すごいいいアドバンテージがあるんじゃないかと思っています。

(東森)

ありがとうございます。そういう意味では、先ほどの生活世界みたいなものを全面的に目指してるというか、もうある種実現していて、自分たちが自分たちらしくあるために、ということを模索しているようなそんな県民性が、先ほどのよさこい祭りにしても非常に自由な祭りですし、私もよさこい祭りのチームをつい数年前まで率いてましたけども、実はルールがもう一つあって、前進しないといけないというルールがありまして、これがまた全国的なよさこい祭りではあんまりないルールなんですよね。踊りながら前進するというのは非常に難しいことでして、他県のチームが高知に来ると前進できないんですよ。その場踊りというのを他県ではやってまして、高知だけ唯一前に進むことができるという非常に特異性を持っているような、ちょっとよさこいに関するそういうような四方山話があるわけなんですけども。そういう自由を高知は謳歌できるような土地かなというのもありますけども、反対に、先ほどイケダさんがおっしゃったように、ある種限界を迎えているような気もしてます。

ですので、宮台先生やイケダハヤトさんに来ていただいて、高知は限界なのか。あるいはまだポテンシャルがどこかにあるのか、まだまだできること

があるのか。イケダさんは今、体を使って、そのポテンシャルの出てなかった部分を引き出してくださってますけども、そういうものがあるのかどうかみたいなのところを、この後ちょっとまたひといていきたいと思いますが、ちょっと戻りまして、イケダさんにお聞きしたいんですけども、東京多摩にお住まいになられて、それで47都道府県日本中に、別にどこに住んでもよかったんだと思いますし、多摩に居続けるという選択肢も無きにしもあらずだったところが、なぜこの四国は南の端の、閉鎖的なのか自由なのか分かんないんですけども、高知という場所を選ばれたのか。そのあたりのエピソードと、そのときお考えになられていたことなどをちょっとご紹介いただけたらと思います。

(イケダ)

これはほんとにいつも言っていて、結構僕ら世代の人たちはみんな同じことを言うんですけど、何というか、僕が高知選んだのは結構直感というか、ビビッと来たんですね。もうビビッと来てしまっって、同じ話はあの安藤桃子さんもしてました。ビビッと来ました。ビビッと来て住みましたって言って、完ぺきに去年の夏盛り上がりました。黒笹さんも、あの釣りバカの黒笹さんも同じことを言ってました。やっぱりね、ビビッと来るんですよ、この場所は。

それは何というか、原稿化すると何かある種陳腐になってしまうんでしょうけど、いろいろ社会的な課題がたくさんあったりとか、やっぱり人の社会文化が違いますよね、他の県と明らかに。例えば、めちゃくちゃお酒を飲むとか、飲酒費用の偏差値が確か90ぐらいだった。偏差値が90っておかしいです、やっぱり酒飲みますよね、しかも年収が低い。どういふことか、よく分からない。あとはご飯がおいしいですよ。また「じゃらん」の調査で確か連年で1位なんじゃないですか。また1位なんですよ、ね、「じゃらん」の調査でもやっぱり飯がうまい。観光客として来たときに満足度がものすごく高いですね。

あとは皆さんのその明るさ、人がやっぱりラテン系というか、すごいオープンマインドですよ。僕

もいろんなところに行きますけど、高知の人はすごくよそ者に対して歓迎のマインドが強いと思います。なので、そこが良かったりとか、あとはいつも僕も仕事で地域活性化とか、そういう仕事を割とやるのですごく重要だなと思ったのは、高知の人って高知が好きなんですよ、基本的に。そういう状況があると、僕も高知好きなんですよ。好きじゃないと来ないですね。なので、大好きですと言うと、みんな仲良くしてくれます。だから、みんな高知好きじゃないですか。これね、すごく重要です。これはどの地域でもあるわけじゃ、やっぱりないんです。高知はだからそこがすごくずるいと思います、いい意味で。すごくずるいんですよ。

ほかの地域なんかだとやっぱり僕の、いつもこの話をするんでそろそろ佐賀の人に怒られそうなんですけど、佐賀に移住しようと思ったときがあつて、佐賀の友人に「僕、佐賀に行こうと思うんだけど、どう？」っていうことを聞いたら、「佐賀はやめとけ」と。「えっ、何で」っていう話をしたら、「佐賀の人は佐賀が好きじゃないから、すごく難しいよ」って言われて、同じことは岐阜市とかでも言われましたね。やっぱり僕は多摩市にもいましたし、多摩市とかもやっぱりそうで、要するに皆さん結構消去法でその町に住んでいたり、あとは土日だったり平日の仕事でほかの都市部へ行っちゃうんですよ。佐賀だったら福岡へ、岐阜市だったら名古屋へ、多摩市だったら東京都心部へ。そうすると物理的にそもそも時間滞在してないわけですよ。そうするとやっぱりその地域に対する愛着とかはなくなっていつて、お金も当然落ちなくなるのでやっぱり経済が衰退していつて、文化もなかなか盛り上がっていかないし、若い人はみんな都市へ出て行っちゃうんですよ。

高知だと幸いにして四国山脈に阻まれていて、もはやどこにも行けない。そしたらおらの国が好きになりますよね。それはだからすごく高知が地勢学的に面白い部分だなと思ってて、やっぱり今の時代そういうところがすごく強みになるんじゃないかというところは来てみても思いますね。なので、まちおこしはある意味で高知はやりやすいし、それはすごくいいことだと思いますから、何かどんどんどんど

んみんなで仕掛けていけるといいのかなと思ってこちらに来た。

でも、来た時点でそういうことはよく分かってなくて、それはもうほんとに僕に限らず、移住者の人は多分ほんとに大体皆さん直感で来ていて、何かここが好きだから来てみて1年、僕だと1年と2カ月かな、1年2カ月ぐらい住んでようやく何かここが好きなのを言語化できていて、何だろう、僕はちょうど山奥ですから、山に住んでそれでまた新しい高知の良さを見つけていつてというプロセスだと思うんですよ。

何というか、移住促進の話も今日のテーマだと思いますけど、あまりだから理由を言葉で説明せずに、もうここへ来てもらえば分かるので、まずやっぱり来てもらって体験してもらって、その人なりに言葉を作って言語化していつてもらうというのがすごく重要だなとも思っていたりします。

（東森）

なるほど。ありがとうございます。ちなみにさっき前段の自己紹介のときにもありましたけども、ご家族いらっしゃいますよね。奥さんは反対されなかったですか？

（イケダ）

いや、うちの妻はある意味象徴的なんでしょうけども、多摩市で育ったんですね。多摩のニュータウンってさっきも言葉ありましたね。ニュータウンで生まれ育って、ほんとにニュータウン育ちです。社会人になって僕と同棲して結婚したので、21年間多摩市のニュータウンで育って、やっぱり多摩市自体、これはうちの妻のほんとにたまたまの個性もあるかもしれませんが、やっぱりニュータウンってすごく画一化されていて文化がないですよ。すごく若いですからチェーン店ばかりです。ほんとにチェーン店しかないんですよ。もうその土地の商店街とか、そもそも商店街が存在、基本しないんです。

それで、そういうところに生まれ育った人間からすると、やっぱり高知みたいなのがある意味真逆なんですよ、高知はチェーン店がないじゃないです

か。チェーンの居酒屋が進出してもなくなっていくみたいなの、すごいです、それは。やっぱりそういうところとかは僕も含めて、うちの妻にとってもすごく新鮮で、しかもやっぱりこっちのほうがおいしいわけです、ご飯とか。こだわりの商品が全部揃ってます。土佐山田のショッピングセンターってすごくこだわりの商品が置いてあって、イオンとはまた品揃えが違うわけじゃないですか。やっぱりそういうところは都会の郊外、真ん中で育ったうちの妻からすれば、面白くて新鮮でいろいろと、また高知は自営業者の人がすごく多いので、うちの妻もちょうど会社を辞めたタイミングだったので、ちょっと自営業をやりたいなみたいな意識があって、高知へ来たらみんな自営業をやっていると。会社勤めの人を探すほうが意味結構難しかったりするわけですよ、山の中だと。そうしたら、やっぱり自分の選択肢が広がるじゃないですか。そういうところを恐らく直感的にかぎつけて、だからうちの妻もある意味今も楽しんで来ているので、すごく。

でも何でしょうね、結構時代は今、なんかそういう時代になってきていて、もちろん個人差はあって、田舎は嫌だっていう若い人たちも多いですけど、でも僕が都会でたまに帰ってやっぱり同世代と話をする、皆さんやっぱり若い、逆に若い女の人ほど都会よりも田舎のほうがいいという傾向も感じるぐらいなんで、それはなんかうちの妻は特殊というより、ある意味一般的にそういう理解が広がっている感じはあります。

（東森）

ありがとうございます。イケダさんは先ほど自己紹介でありましたように、高知から一旦、具体的な地名を言うと万々ですね、高知市内に引っ越しされて、それからさらに先月本山の標高 500 メートルのクライנגアルテンに引っ越しされたということで、これは高知の中でいうと人の流れとちょっと逆の方向に……。

（イケダ）

そうですね。

（東森）

行かれていますよね。だから、より田舎へ田舎へと。

（イケダ）

多分さっきのお金の話だったり、以前の話とつながると、結局田舎のほうが人がいないということは僕らみたいなコンテンツ、僕は文章ですけども、文章と写真と動画ですけど、僕が扱ってる仕事のジャンル、そういうものは人がいないところのほうが有利なんです。だって、書く人がいないわけですから。そういうところの情報っていうのは上がってこないんです。だから、東京でどれだけ優秀なライターの人でも、さすがに本山町大石に住まないとやっぱり書けないことがたくさんあるわけです。なので、僕は東京で有象無象にいる人たちとはそもそもある種土俵が違うというか、僕しか書けないことがたくさんある状態にいるわけですよね。それはやっぱり今の時代のビジネスのすごく面白いところだと思います。

その希少性があるもののほうがコンテンツとしてはやっぱり受け入れられやすいので、僕みたいな仕事をしていると、多分それはアートな仕事だったり、あと例えばプログラミングや何かものをつくったり、デジタルで何か仕事をしてる人ってのは大体同じような法則があるんじゃないかと思います。それをやってる人が少ないところにいればいるほど、その人はよく受け入れられやすい。僕はやっぱり 200 人ぐらいしか住んでない限界集落にいるからこそ、逆に文章が読まれるわけです。それはすごく面白いなと思っていて、こういう形でビジネスが多分逆に田舎のほうに流れていくっていうところが今結構見えてくるんで、限界集落に入ってくるライターさんとか編集者とか、あと写真家さんとか作家さんとか、そういう不定期な仕事をする人は僕はまだまだ来ると思ってますね。

（東森）

なるほど、分かりました。ありがとうございます。またちょっと後に、少し驚きのビジネスのことを皆さんに紹介したいなと思ってますけども、それ

はちょっと後にしまして、今度、吉村さん。イケダさんとは反対の方向と言うとあれかもしれませんけど、イケダさんは東京から高知へ入って来られたと。吉村さんは生まれも育ちも高知で、大学4年生で進路選択の今のこのときに高知に残るといいますか、高知で住む、高知で仕事をするという選択肢を選ばれたわけなんですけども、なぜその高知の企業を選ばれたのか。大学卒業後にある種東京志向だったり、都会に行こうというのではなくて、高知で自分の生活をしていこうというふうに思ったのかという、このあたりのところを少しお話いただけたらと思います。

(吉村)

将来どういうふうに、どんな仕事に就いて生活をしていくのかって悩んだときに、もちろん県外に出るっていうことも選択することはできたのですが、私はやっぱり高知に残ろうと決心しました。それも私、双子なんですけど、でも二卵性なので顔は全く似てないんですけど、ずっと生まれてから一緒に、保育園、小学校、中学校、高校とずっと同じ学校で部活動も一緒だったんですよ。なので、もうほんとに毎日同じように暮らして、同じものを食べて同じところに行きってというふうな暮らしをしてきたんですけど、初めて大学どこに行くっていう話をしたときに、初めて分かれたんですよ。それは私自身もすごくびっくりして、もちろん相方のほうも高知に残るんだらうなって思ってたので、向こうは「私は大阪に行きたい」と断言しまして、どうしたんだらう、もう私にも？？しか浮かばなくて、何でわざわざ出ていけないのかっていうところがあったんですけど。

やっぱり思い返してみると、私はどちらかというと、相方よりは小さいときから地域の人と接することが多かったんですね。例えば小学生のときはスポーツクラブを募集していて、地域の人たちが講師として来て、そのスポーツクラブに入りませんかっていうお誘いがあったんですけど、私は、あっ面白そう、しかもそのスポーツがホッケーだったんですよ。ホッケーなんてしたことないし、面白そうやなという好奇心で飛び込んでいったんですけど、で

も一方の相方は本を読むのが好きで、ずっと図書館に通って家で本を読んでもっていうことが多かったんですよ。

だから思い返してみると、そういうところから少しずつ価値観っていうのが変わってきたのかなと思って、なので例えば夏休みとかに祖母の家とかに行くと、二人とも観点が違うんですよ。私の祖母は結構活発で、畑を持ってるんですけど、隣の畑ごとに作ってる野菜が違って、ナス、トマト、オクラ、レモンの木まであるって感じで、私はすごくそういうところに感動したんですよ。すごく狭い敷地なんですけど、そういういろんな知恵、工夫をして、いろんなのを育ててる。それからちっさい小屋みたいなのも作っていて、自分の家とは別にそういう自分の娯楽といいますか、そういうところに何てたくましい生き方をしてるんだっていうふうに感動したんですけど、やっぱり相方してみると、畑で何か作りゆう、ちっさい小屋とかも、ああおばあちゃんが趣味でつくりゆうがやっていう感じで、そういうところから少しずつものの捉え方というのは変わってきたのかなっていうのがあったので、将来何をしたいかっていうときに、一方は県外に行きたい。私は高知に残って、そういう文化だったり、高知のために何か貢献したいっていう思いが芽生えてきたので。

私のその小さいときから地元の人とかかわることが多かったっていうのがその原体験となって、地域志向っていうのが芽生えてきたのかなと思います。

(東森)

なるほど。ありがとうございます。あれですね、双子なんですね。お姉ちゃん？

(吉村)

向こうが姉で、私が妹です。

(東森)

そうですね。それでお姉ちゃんがどっちかというとインドア派、おうちで本を読むことが多くて、吉村さんのほうが地域の人と交流することが多かったことが、もしかするとその岐路の分かれ道に立って

るんじゃないかという。

(吉村)

そうですね。やっぱり大幅な体験とか変わらないんです、一緒に生活をしてるので。育ってきた環境や学んできた教育っていうのも同じなんですけど、やっぱりそういうときに、私の中ではそういう体験が種となってあったので、大学に行って就職ってなっても、それがどんどん芽を出してきたのかなと思ってます。

(東森)

なるほど。ちなみに高校は山田高校？

(吉村)

山田高校です。

(東森)

山田高校を卒業、進路選択のときに、大学は日本中にあるわけなんですけども、また何故に高知県立大学を選ばれたんですか。

(吉村)

先ほども少しお話をしたのですが、やっぱり私がこの高知に残るっていう思いの軸となったのは、じゃあ私が高知に残って一体何ができるんだろうっていうのが一番あって、それだったら高知県の抱える課題は中山間地域に多くあるんじゃないかっていうところに視点が行きまして、それなら大学でその中山間地域の課題を専門的な視点から、その解決策を学べるところに行きたいっていうので大学を選んでたんですけど、でも、その中でも私は高知県立大学、元女子大なんですけど、そこの一つのゼミにすごく引かれました。通称「清原熱血ゼミ」って言ってるんですけど、先ほどもお話しした香美市の平山地区と5年ぐらい前から継続的に付き合いさせて活動しているゼミでして、とてもそのスタイルっていうのにも引かれましたし、あとはやっぱりその先生の熱血さに引かれまして、私も将来そういう熱い思いを持った人間になりたいと思いまして、それならそのゼミでしか学べないことっていうのを突き詰

めたいって思いまして、高知県立大学の文化学部に行こうと思いました。

(東森)

ありがとうございます。私、ちょっと進路選択に少しかかわらせていただいたんですね。私自身もスーパーマーケットのOBなんです。17年ほどスーパーマーケットの社員をしまして、3年ぐらい前に、宮台先生流に言うところのリスクのほうを取って会社を退職しまして、40歳で定年かなと思って、それからはフリーランスとして自分のやりたいことをやろうと思って独立したんですけども、独立してみても見えたのは、スーパーマーケットという仕事の社会的地位が決して高くない、むしろ低いってことです。大学を出てまでスーパーへ行くのかみたいなのがいまだに、私が就職した20数年前もありましたけども、現在に至るまでも学生さんの就職にかかわることがあるんですが、自分の生まれ育った業界であるスーパーにできるだけ人材確保ということで斡旋をするんですけども、親の方からの反対というのが結構あるんですよね、大学まで出てスーパーに行くのか、みたいな。

吉村さんところはそれを乗り越えられたんですけども、乗り越えられたときのエピソードとかもきくとあるんじゃないかと思いますし、吉村さん自身がそのとき考えたことって多分あると思うんですけど、構わない範囲で皆さんにご紹介いただけたらと思います。

(吉村)

そうですね、やっぱり親からは「なぜスーパーなんだ」っていうのはすごく言われまして、特に父のほうから、母とは友達のような関係で何でも話していたので、ある程度私の思いっていうのは汲み取っていてくれて、やっぱり父は初めはそれこそ聞く耳も持ってくれない状態で、それ私もそうなんですけど、就職活動する前に、地元のスーパー受けたいって言ったら絶対に止められるかなというのは分かっていたので、言わずに受けたんですね。強行突破みたいな感じなんですけど、それで内定をいただいたときに初めて、「実は地元にはスーパーがあるろう、

山田のショッピングセンターさんに内定をいただいて、私はそこでずっと働きたい」っていうことを伝えたんですけど、やっぱり父からしたら、もうちょっとお堅い公務員だったり、そういうふうなほうに就いてほしかったらしくて、しかも大学で地域の活性化、まちづくりを学んでいるので、それだったらなおさら市役所に行ったほうがいいんじゃないかっていうことをすごく言われたんですけど、私がしたいことはそこではできないということを言いまして、まだこれ話がちょっと長くなるんですけど、少しずつ私はこういう思いを持って、大学ではこういうことを学んで、だから、就職先はもうここしかないっていうことを伝えていったら、少しずつ父の固い脳みそもちょっと柔らかいできて、「おまえがそこまで言うんやったら、そうか、やりたいことをやればいいよ」っていうふうに最終的には理解をしてくれました。

(東森)

吉村さんのお父さんって、多分僕とあまり世代変わらんですよね、きつとね。

(吉村)

そうですね、50歳手前ぐらい。

(東森)

じゃあもうちょっと僕が若いのか。ありがとうございます。ということで、お父さんも何か最近積極的にその商品買ってきてくれたりとかっていうことで理解が進んでるみたいなんですけど、吉村さんの話を聞くにつけ、もしかしたら私たち親世代、私も高校3年生の息子がいますけど、こうあってほしいなみたいな親の理想みたいなものがあると。もしかすると高知で住み続けていることが、先ほど宮台先生の高度経済成長期だとか20年前のバブルの頃、私はバブルアフター直後なんですけど、やっぱり都会に出ることが勝ち組みたいなイメージがあると。もしくは公務員志向があると。大学を出ていい仕事に就くっていう固定観念みたいなものがあるんですよね。

でも、吉村さんみたいな若い世代の方がそこを打破しに行こうというところでちょっと摩擦があって、それを乗り越えていくということが、もしかすると今日のシンポの命題の答えの一つにも行き着くんじゃないのかなというふうに思ったりしますが、宮台先生いかがでしょうか。今お二人ですね、対照的な、イケダさんは東京から高知に引っ越しをされた。吉村さんは地元の超ローカル高校から一旦ちょっと高知市のお町の大学には出たんですけど



も、再び超ローカル企業へ、というこの流れを、お二人の話を聞いていただいて、前段の基調講演の考え方とも照らし合わせて、あるいは宮台先生なりにお感じ取りになられてることなどございましたらご紹介いただけたらと思いますけども、いかがでしょうか。

(宮台)

キーワードは「価値」っていうことだと思うんですね。イケダさんの話に、高知の人は高知が好きっていう話が出ていましたね。それで思うのはスコットランド独立運動なんですね。スコットランド独立運動の背後にあるのも、スコットランド人は実はスコットランドが好き、ということなんです。そして、イングランドのことは嫌いあるいは大嫌いなんですね。どうして嫌いなのか、好きなのか。それを突き詰めるところから、スコットランド独立運動ってのは性格を変えたんです。以前はアイデンティティ追求運動だったんですよ。アイデンティティ追求運動っていうのは結構難しいところがあって、例えばケルト人とかゲール人とかあるいはイングランドの人たち、いろんな人がいるんです。

沖縄なんかも近いところがあるんですが、アイデンティティっていうと分断あるいはひびが入ったりすることがあるんだけど、スコットランドはそれをやめて、スコットランドの価値って何だろうっていうと、あそこは少し寒いところで、映画とか見るとよく分かるんだけど、ほんとにさびれた工場街があるんですね。グラスゴーとかエジンバラとかそういうのがあって、しかし、みんなそういう寒いところでバーに肩寄せ合って酒を飲むんですね。価値っていう点からいうと、戦後4年間を除いてはひたすら保守党ではなくて労働党の議員を選出してきたという、決定的に特異な価値があるんですね。

つまり先ほど申し上げたような意味でイギリス流、墮落した新自由主義、つまり市場原理主義のようなものはスコットランドの人は大嫌いなんですね。基本的には、みんな結びついてつながり合うようなセオリー好きなんですよ。自分たちのスコットランドの価値観はイングランドとは違うと。スコットランドはそういう価値をみんながシェアして

るから好きなんだ、それがスコットランドの人たちの価値なんだというふうに読み替えて独立運動をしたんですね。しかし、もともと独立が目的ではなくて、自治権の獲得が目的だから実際に独立しないで、その代わりこれだけの自治権を渡してやるとかっていうふうにして、キャメロン首相が現地に入っていろんな譲歩をした結果、巨大な自治権を獲得することになったんです。

自治が意味があるのは、その地域の独自の価値がある場合だけですよ。実は先ほど共同体自治とか自治的経済圏という話をしましたが、そこに多くの人が意味があると思って真剣にかかわる、つまりコミットするということが可能になるためには、やはり高知ならではの価値観あるいは価値、平たく言うと、高知の人ならではの幸せ、高知の外側にいると味わえないような何かっていうのが高知にあるっていう感覚をシェアしているかどうか、すべての基本になると思うんです。

実は僕の周りでも、僕も物書きなので、沖縄に移住を考えたことが10数年前にあって結局断念したわけだけど、実は物書き、つまり情報の仕事をする人は今インターネット化を背景にして、イケダさんもおっしゃったように事実上どこでも仕事ができるということで、ノマド的に遊牧民とか遊動民的に移動先を探している状況になってきていて、それはこれからもどんどん広がっていく流れだと思うんだけど、ただ、今のところはまだ、イケダさんもおっしゃったけど、ビビッていうその直感の次元を言葉にするっていうのがなかなかまだできていない。そういう状態だと思うんですね。

例えばヨーロッパなどではスローライフとかスローフードとか、あるいはそれと関係するけどフェアトレードとかそういうのがあって、例えば、高知の人なんてやってらっしゃるかもしれませんけど、スーパーマーケットは安くて品揃えが豊富だけれど、スーパーで物を買ったら地元商店つぶれちゃうし、人間関係もなくなっていつちゃうなということで、少し高くても地元商店で買うようにしてるんだぜっていうのがまず基本なんですよ。基本的なフォーマットとしてずっと続いてきているんです。それは普通に頭が働いてるわけです。

だから、例えばスローフードって言うと、日本だと何か知らないけど、有機野菜を食べることみたいになっちゃってるんですけど、それはパーフェクトな誤りで、実際には顔の見える範囲に行って顔の見える範囲から買うから、知り合いに対して取り引きしてるのでいいことをしようと思うんですね。悪いことをしようとは思わないわけです。ところが知らない、顔の见えない範囲に対して仕事をする場合には、抜け駆けとかフリーライディングを含めてずるをしようとするんですよね。ばれたら逃げればいい、あるいは罰を受ければいいだけの話ですよ。

スローフードってそうじゃなくて、顔が見える範囲でコミュニケーションをするので、悪いことをしようという気が起きない。このポジティブな意欲でつながって経済活動を行う。これがスローフードの基本なんですね。そのようにして自立的な経済圏ができる。地域の農家も維持できる。地元商店街も続く。したがって、雇用が確保できるだけじゃなくて例えば町並みとか、地域のお祭りのような文化とか、あるいはそれを含めた町のおいや全体が保存できると。これがスローフードなんですね。だから、その意味では有機野菜とかトレーサビリティ、今日のこのレタスは何とか県の誰々さんが作りましたとかってモスバーガーとか行くとあったりしますが、あれは実はスローフードとは何の関係もないというね。あれは全部ロハスなんです。

ライフスタイルとしてトレーサビリティとか言っていて、アメリカのウォルマートというでかいスーパーが90年代にヨーロッパのスローフードに恐れをなして、それに対抗するためにトレーサビリティとか有機野菜とかっていうのを前面に押し出したのがそのロハスっていう流れなんですね。ヨーロッパではちょっと南、イタリアとかフランスの人たちは、ロハスは巨大スーパーが生き残るための戦略だってことを完全に見抜いているんですね。だから、基本ロハスとスローフードは違って、スローフードはその地域を自分たちが支える運動なんだっていうことを理解しているわけです。そのようにして例えば資本主義にかかわるとか、同じ資本主義でもアメリカのような展開とは違う展開を望めるぞっていうふうになっているんですよ。

ビジネスの世界から成り立ってるのが資本主義なわけですが、さっき社会的包摂を旨とするソーシャリティビジネスをやっていくっていうことをイケダさんもおっしゃられてましたけども、人々がどういう意欲、どういう価値観を持つかによってできあがるシステムが違っていくっていうのが資本主義のいいところなんですよ。それは地域社会にとってもいいものとして機能する理念なんです。しかし、やりようによっては、増田レポート的な方向に機能するものでもあり得るので、それを決めるのは価値観なんですね。

(東森)

ありがとうございます。今、価値観というお話をしていただきましたけども、私も先ほど言いましたようにスーパーマーケット出身として、今スーパーマーケットを取り巻く小売業の地域密着度を高めていくにはどうしたらいいのかみたいな中で、やはり買い支えていくとか、使い支えていくみたいなことが結構クローズアップされていく部分なので、はたまたそれと逆行するような、価格だけで安いほうを選んだらいいのかとか、ネットで手に入るからそっちで買っちゃえばいいのかなみたいなことが進んでいくと、その商店街のみならずスーパーマーケットでさえも衰退していくというような構図があるんじゃないかなということを身を持って、今感じているところです。

そういうことで、先ほどイケダさんに少しビジネスの紹介をと言ったんですけど、私がイケダハヤトさんと1年ちょっとお付き合いする中で、超びっくりしたもう一つの話で、そんなものに価値があるんかっていうことで、ヤフオクで何かすごいものが売れるっていうあの話をやひちょっと皆さんに。

(イケダ)

あの話ですね。以前、NHKの番組で高知の移住者特集した番組があったんですけど、もしかしたらご覧いただいた方もいるかもしれませんが、居酒屋でひたすら酒飲みながら高知の皆さんについて語るという2時間番組で、NHK高知、大丈夫か(笑)という感じの番組をやっていたんです。その

ときに東洋町の移住者の方が言っていて、僕もすごく衝撃受けたんですけど、もともとその移住者の方はネットでビジネスをすることがうまかった方で、確かヤフーオークションとかでいろんなものを転売してお金を稼いでいたような方なんです。

それで東洋町に空き家状態だった家に、お住まいになったら、でっかいムカデがいるわけですね。すごいサイズですごいスピードで動く、あいつですよ、あいつがいます。それも結構いると。その方はもともとヤフーオークションをやった方なんで、これ売れるんじゃないかと思ったらしい。すごいですよ、発想がすごいなと。ムカデ売るのか、生きたまま捕獲して。で、捕獲したらしいんです。捕獲して、生きたまま、ヤフーオークションを見たらムカデをそもそも売ってる人が結構いたらしいんですね。今スマホ、ネットつながったら、ぜひヤフオクでムカデ検索してみたら多分あると思います。要するに、商品としてあるんですよ。

二つパターンがあって、ペットのえさ、一つは。アロワナのえさにすると、アロワナの発色が良くなるらしくて。知らねえよみたいな話ですごい面白いんですけど、そういうのとあとは観賞用で、純粋にペットとしてムカデを飼う酔狂な方たちが、やっぱり日本は広し、いろいろいるわけですよ。そういう人たちが買ってくれて、実際そういう方に確保したムカデが1,000円で売れたらしいです。

ちょっと余談があって、その落札した後に逃がしちゃったらしいんですよ。しまったと、逃がしてしまったと。でもムカデには事欠かないので、もう1回捕まえたんですよ。もう1回捕まえてもう1回写真を落札者に送ったら、なんか前のムカデよりかっこ良かったみたいで（笑）、すごい感動してくれたらしいです。足がちょっと赤かったらしいです。これはかっこいい。こんなもの1,000円でいいんですかみたいで喜んでもらえたらしくて、だから僕はすごくほんとに笑い話としても面白いですよ、でもビジネスとして非常に面白いなと思ったんですよ。誰もムカデになんて価値を見出さないじゃないですか。なかなかその発想には至らないけれども、いざ確保してネットにスマートホンでパッと撮影して、ヤフオクのアプリでアップしたら一瞬でできま

すからね。それでもうそれが1,000円になるっていったら、結構ビジネスとしては収益性がまじめにいいわけですよ。なので、年商で多分1,000万とかは難しいでしょうけど、でもちょっと移住者の方が、ムカデとかに抵抗感なければ平気ですけど、毎年いくらでしょうね、毎年10万とか20万とかムカデ販売で稼ぐっていうのは意外と現実的なんじゃないかと。まあちょっと冷蔵庫とか開けたくないですけどね（笑）。

（東森）

イケダさん、今見たらですね、沖縄の方がヤンバルオオムカデを出品していて6万円で出してますね。現在オークションで45,000円まで値が付いてます。

（イケダ）

おお、すごいですね。だからあるんですよ、そういうニーズがあるんですよ。多分ね、僕らが知らないだけなんですよ、そういうのは。多分本当に僕らが身近なもので高く売れるとかっていうのは、やっぱりインターネットの経済ってすごくそこが面白くて、多分ほんとにまだあるはずなんですよ。もちろん法的な部分だったり、何せいろんな問題はあっても可能性もあるんでしょうけど、まだ今一般に流通していないものすごく希少性があるもの、でも高知にごろごろあふれているものっていうのは多分あるんですね。それを本気でみんなで考えていったら面白いんじゃないかって話を、僕はいつも思ってますね。

（東森）

ありがとうございます。今結構スマートホン触り始めた方が多くて、めっちゃめっちゃ検索してると思いますが、ほんとにあるよみたいな感じですよ。冷凍して10匹セットとかね。

（イケダ）

ありますね。

(東森)

すると1匹1,000円ですから10匹だと、掛ける10なんで1万円のロットで販売することが可能なんですね、えさ用で。いうこともできますし、東洋町のムカデということは東洋町天然ムカデなわけですから、養殖なんかしてないわけですから。そうすると、四万十川流域だと四万十川流域の天然ムカデですよ。で、体長が10センチオーバーとかなると、それにときめく方もいらっしゃるんですね。

(イケダ)

あと僕の友人にゴキブリが好きなやつがいて(笑)、四万十のゴキブリを欲しがってましたね。結構森に住んでるゴキブリって、町にいるあの黒いシャシャシャッと動くのとはまた違うんですよ、品種が。多分四万十なんかの山の中にはほんとにのっそりのっそり大きいサイズのオオゴキブリって言うんですかね、ジャングルの熱帯とかにいそうなゴキブリがいるらしいですよ、彼の情報では。そういうのもニーズがあるんで、意外とそういうものは何かまだまだ案外眠っていて、大人一人ご飯を食べるくらいだったら案外それっていけちゃうんじゃないかと、結構山の中にあるんじゃないかと思えますね。

(東森)

ということで、ここでこれだけムカデの話が盛り上がるとは思わなかったんですが、それは意図的に今振ったんですけども、つまり高知市でも、県内のそれぞれの産業、1次産業・2次産業・3次産業を見て、限界感を感じるところがあるわけですね。もともと生まれ育って高知に住んでる私たちとしては、もうこれ以上県内産業に新たな余地はないんじゃないかと。むしろそれこそ高知市のあの杉井流のあたりから鏡川大橋へ下ってくるあの通りなんかを見ると、北からあるのはローソンそれから吉野家、すき家、マクドナルド、ココイチ、丸源ラーメン、ガスト、県外資本ばかりなんですよ、食べ物屋さんにしても。だから、新たに生まれてくるのはそういったお店だったりとか、県外の資本ばかりで、県内発の例えばムカデを売ってやろうとか、ゴ

キブリをうまく捕まえて養殖して増やして何とか売れないかなとかっていう着想で、新たな事業を生み出すっていう勢いが実は県内にもっともっと必要なんじゃないか。もしかしたら、そこに大きな市場があるんじゃないかなというふうに感じてるわけですね。

そういうところをつくるということで、宮台先生のお話の中にもそういう要素があったと思いますけど、そういう意味では、吉村さんはその既存のビジネスモデルとしてスーパーマーケットというところに勤めることになろうかと思うんですけども、じゃあそこでそういう発想で何かしてみたいなと、こんなこと可能性があるんじゃないかなというふうには何か考えてることとか、実現の可能性はともかくとして夢みたいなことでも構わないんですけども、何かこうやってみたいなとか、何かありますか。

(吉村)

そうですね、まずはそもそも何で私がスーパーマーケットを選んだのかっていうところから話をさせてもらいたいなと思ってるんですけど、やっぱり先ほども申しましたように、大学で学んでいることを活かすなら市役所や公務員のほうに行けというふうには親からも、周りからも言われてたんですけど、でも市役所にも入ったとしてもいろいろ3年ごとに部署が替わったりとか、小さな仕事がたくさんあると思うんですね。例えばスーパーマーケットだったらもっと大きいところに行けばいいんじゃないかとも言われたんですけど、大きいスーパーマーケットというのは最終的に利益をどれだけ生み出せるかというところに目が行くと思うので、そうなる私は第一線で自分のしたいことができないなと思いました。

私が就職をした土佐山田ショッピングセンターさんなんですけど、値段が少し高くてもいいものを売ってるんですよ。無添加だったり、その地元のものというのもあるんですけど、あと香美市にしかない素材を持ってきて、それを商品化して地域の人に売ってるんですよ。私はそういう会社の立ち方がすごく好きで、そこに共感してここがいいと思ったん

ですけど、そうなったときに、じゃあ私が入って何ができるのかと考えたら、私は大学でいろいろ中山間地域に入って、そこにしかないものをたくさん見てきたんです。珍しいものだったり、あっこれって見たことあるけどこんな使い道があったんだっていうような、すごい宝物がいっぱいあるなっていうのは大学ですごく実感したことで、じゃあそういうものの、地域にしかないものがどうして今流通してないのかっていうところで考えたんですけど、やっぱりそのロットが揃ってないからっていうのはあると思うんですけど、でも多く仕入れて販売する、それで利益を生むっていうのは地元のスーパーでは求めてなくて。求めなくていいと思うんです、地元の小さなスーパーだから。ですが、少しでもそういうものが出るようになったら、地域に利益を生み出すことができるんじゃないかと思ひまして、それだったら私が何か力になれることがあるっていうふうに思ひました。

そうすると、さっき話したように、地元のスーパーだからこそできるというのが一番にあつて、私はスーパーはまちづくりだなと思ひておひまして、まちづくりの仕方っていうのもいろいろあると思うんですけど、その中でも私ができる、文化学部で学んだその素材にあるストーリーを伝えることっていう力は、地元のスーパーマーケットに活かすことができるんじゃないかと思ひて、私はそこに就職をして、やろうと思ひてます。

少し前置きが長くなつたんですけど、やってみたいことっていうのは、これは私の考えなんですけど、私がある地域に入つて見てきた中ですごく感動したのは、エゴマをご存じですか、皆さん。今そのエゴマの油とか結構売つてるとあるんですけど、私が見たのはエゴマの油じゃなくて、エゴマそのものをご飯に振りかけてふりかけのようにして食べてたんですよ。エゴマを多分煎つてカットしたのと、あと塩を混ぜて食べたんですけど、それが普通に地域では出てたんです、おにぎりの上にちょちょと載つて。それを私食べた瞬間すごく感動して、こんなおいしいものがあるのかとすごいそれに感激を受けたことを覚えてて、そういうもの、その地域にある良いものをその地域の人が買う。そういうことを

今後のスーパーマーケットが目指していったら、地元利益を生み出すことができるんじゃないかと思ひてます。

(東森)

ありがとうございます。スーパーマーケットという選択をしたときに、そこは単なる食品小売という場所ではなくて、その向こう側にある地域を活性化させるための、ツールの一つなのかもしれませんけど、場として自分が役に立てることがあるんじゃないかという可能性を試すためにこの選択をされたということで、ちょっと私もそれにはほんとびっくりしたといひますか、あつすごい考え方だなというふうに教えていただいたという感じがします。

吉村さんはさつき子どものときに地域に出て、いろんな人とつながつたっていう経験が地域志向ですね、その地方なり地域に向かわせてる判断になつてるとおっしゃいましたけれども、私もそれにちょっと近いようなことを最近経験をしてまして、高知で言う和高知市には大学があるわけですから最高学府まで進学できるわけですね。ところが、香美市は工科大があるからいいとして、その他の市町村になると高校までなので、高校生を卒業する段階でもう否応なく市外あるいは町外に出るしかないっていう自治体が結構たくさん、結構というかかなりたくさん日本中にあつて。

これがお隣の香川県の観音寺というところの町がやっぱり同じく観音寺市内に高校から上の進学先がないと。なので、高校を卒業すると80%の子たちがみんな市外に出ちゃつて。その子たちが今度観音寺に戻つてくるかつていうと、かなり戻つて来ない。細かな数字は忘れましたけども、戻つてくる率がもうほんとに非常に少ない。みんな高松市であつたりとかあるいは大阪近辺とかで就職しちゃつて観音寺へ戻つてこないということで、危機感を抱いた地元の商店街の方たちを中心にしたメンバーの方が、高校生までに観音寺のまちづくりを考えるワークショップをやろうということで今動き始めてまして、その資金を獲得、いろいろ活動するのにもお金が必要ということで、お金を集めるためにクラウドファンディングのシステムを使つてお金集めを

されてました。ただ、それもお金を集めるだけではなくて、活動してるということを知ってもらうために意図的にクラウドファンディングという仕組みに乗せたと。それも情報リリースをするということも兼ねて使ってたっちゃって、現在ワークショップを月にフェイスブックで見る限り2回ぐらいやってるんでしょうか。高校生を集めて、観音寺がどうあれば、あなたたちが戻ってきたい町になるのかっていうことを一緒に考えていこうということをやっています。

だけど、なぜそういうことをしてるかという、大学がないからです。高校までしかないのでみんな出ちゃうんで、戻ってきってもらうためにはこの町を、宮台先生がおっしゃられたように「好き」だと、この町で忘れられない経験を高校生までにしておくことが一つのポイントかなということで、そういうことが観音寺でも起きてますし、東北岩手県の釜石でも同じように、高校生たちを中心にまちづくりの再構築ということでワークショップをしていて、それがちょっと一つのポイントかなと、吉村さんの今のお話なんかも含めて感じた次第です。

宮台先生、何かこのあたりのところは恐らくいろいろ日本中の事例とか、何か先ほどの資料の中から読み解けるようなものもお考えとしてはあるんじゃないかと思いますけど、どうなのでしょう、高校生ぐらいまでのその地域の中での経験というふうなのは、その後のその「地方へ向かうのか」っていうところで何か影響を与えてることってあるんでしょうか。

（宮台）

それは、すごく大事なポイントですよ。ほんとに産業構造がどんどん変わってきているので、かつて例えば僕が経験したようなメディア環境や近隣の社会環境ってのは既にはないんですね。それをまた探して住もうとかなんて考えても実際うまくいかないわけですね。大事ななと思っているのは、共同体にしてもあるいはメディアにしてもかつてと同じものがないときに、かつてあったものが与えてくれた、あるいは果たしてくれた機能に似たようなものを果たすものがどこにあるだろうかなと探すことだと思います。

うんですね。一見すると形が似ていなくても、実は与えられる機能が同じだということがたくさんあると思うんです。

僕は東京に住んでいるんだけど、東京は例えば世田谷区東部だとか高円寺阿佐ヶ谷近辺の人たちっていうのは、もともと地元の人が住んでいる中に、そこが好きで新しく入った新住民が結構いると思いますが、この人たちが旧住民と一緒にになって、昔あった町と同じ機能を果たすものをつくれなかったってやっぱり工夫をするんですね。例えば僕なんかだったら、僕は物書きなんで昼間から家にいることもありますから、もっと言えば子どもが出入り自由な場所にしようとするわけですよ。そうするともちろん子どもを迎えに来たりする親とも知り合いになれるし、それによその子っていういろんな実験もできるんですね。

子どもと仲良くなるのは、小学生なんかでしたらやっぱりウンコなんです、ウンコ（笑）。子どもは皆ウンコ大好きなんですね。一緒に歩きながら電柱にウンコの絵を書いたりして。でも、ちゃんとあれですよ、ろう石があるんですよ、消せるように、器物損壊にならないように。そうしているとその途中で、「ウンコのおじさん」とか言って、学校にいてもみんな飛びかかってくるとか、そういうふうになるんですね。昔、地域社会に変なおじさんっていましたよね。最近やっぱりそういうの包摂する力が地域になくなっちゃったんでなくなったんだけど、だったら、自分が変なおじさんになろうとかっていうふうを考えればなれるし、イケダさんなんかなれますよ、きっと（笑）。変なおじさんって結構ポジション高くて、子どもたちがみんな寄ってきてすごい楽しいですよ。

ていうふうなことをやっぱり自分でつくり上げていくっていうことが、僕は機能の引き継ぎだと思うんですね。地域がこうだからっていうんじゃなくて、その地域に昔あったものと同じような機能を果たす何かをつくろうとか。今は変なおじさんがいないから、じゃあおれが変なおじさんの役をするみたいなことだってするわけですよ。

あるいはご存じのように昔は、アメリカの木材100%を使った2×4（ツーバイフォー）住宅って

いうのはなかったんですよ。これ 90 年代半ばの建築基準法緩和でなったんですが、それまでは和風軸組建築がベースの集落だった。そうすると井戸端があって、縁側があるってのが普通だったんですよ。でも、今は新しい住宅はそういうものがないので随分動線が違うんですね。そうすると当然ながら昔あったような出会いですね、エンカウンターやコミュニケーションがなくなってくるんで、だったらそれをどうやって調達したらいいのかっていうふうにやっぱり工夫しなきゃいけないと思うんですよ。

やっぱり多くの地域は、僕の住んでる地域もそうですけど、祭りを重要視してますよね。従来の祭りがなくなったら、学校を舞台にしてみんなで何か祭りをやろうとかというふうにして、昔存在したいろんな親子のふれあいを理想としたら、どうやったら実現できるんだろうかというふうに考えることが大事だと思うんですね。

僕は映画批評家でもあるので、昔の映画をよく見たりする。時々こう思うんです。僕が今タイムマシンで昭和 30 年代に暮らしている 56 歳の人間が突然今に転送されてきて、ここでしばらく過ごしたときに何が欠けてると感じ、じゃあそれを今あるものを使って、どうやって似たような機能を果たすものをつくれるだろうかと思うだろうとか、こういうふうに想像するんですね。

なので、もう一度単純に、ノスタルジーはあまりそれだけでは機能しないんだけど、もう少し中長期に考えて、かつてあったものと同じものはないけれど、似たような体験を、あるいは似たような機能を与えるような何かを今ある材料を使って組み合わせつくれないかなというふうに考えていて、それを通じて、例えば若い世代の体験を組織していけるんじゃないか。

体験を組織するっていうのは、皆さんあまり聞いたことないと思うんですが、僕にとっては例えば映画をつくるとか、時間消費型のモールをつくるとか、これ全部体験のデザインなんですよ。スーパーの棚を作るとか、あるいはそのスーパーを今申し上げた時間消費型のスペース、何も別に買いたいものがあるわけじゃないけど、あそこに行くと何となく

いい感じになれるみたいなね、そういう体験を組織する。あるいは、体験をデザインするという観点を最大限重視して、そこに若い人たちにとって一種のコミュニケーションのような感覚をビジネスを通じて作っていくっていうふうになれば、そういうときにももちろん価値が重要になるんだけど、その価値をあまりノスタルジックに昔のものに縛りつけられたような形に構想すると足をすくわれちゃうので、昔のものは良かったとして、じゃあ何が良かったんだろうということを抽象的に次元をずらして考えてみて、じゃあそれと同じような体験を組織するということを考えると前向きにやれるので、ぜひそういうふうに皆さん大人の人たちがやっていただきたいと思うんですね。

（東森）

ありがとうございます。ちょうどですね、今会場からの質問票にもそれにちょっと近いご質問がありまして、地方回帰志向の若者を受け入れるべき地方にとって、社会の包摂性の条件がどれだけ整っているとお考えでしょうか、と。あるいはここにはないんですけど、どういうものが具体的に必要なんだろうかということにもつながっていくんじゃないかと思うんですけど、先ほど言われた、体験をデザインするという事で言うと、高知だったらどういことが体験をデザインすることになるのかとかですね、日本全国的に条件がどれだけ、その社会の包摂性の条件がどれだけ整っているのか、あるいは整っていないのか、整いつつあるのかみたいなところ、このあたりはどうでしょうか。質問がこのような形で届いてますけども。

（宮台）

実際問題としてイケダさんや僕のように子どもがいる、僕も 3 人子どもがいますけれども、子どもがいるかどうか、子どもが何人いるかどうか、子どもの年齢層がどういう年齢層であるのかとか、今学生なのか社会人なのかとか、要はそのライフステージとライフスタイルによって当然ニーズが違う。抽象的にはニーズが違うということになるけれども、必要としている諸々が違うんですね。なので、一般的

にその社会がいわゆる一般ピープルにとって意味のあるリソースがあるかどうかというふうに問題を立てるとよく分かるのかもしれませんが、例えば限界集落なんかのCMが出ましたら、増田レポート的な発想だと、いつもそう、若年の人口をもっと増やして競争力のある地域社会にしなきゃいけない、となってしまう。

でも、僕がよく言うのは、そんな必要は全くなくて、年金生活者は年金だけで、年金だけをいわば元手にして、それでフローをなしていくような社会は現にあるし、やっぱりそれでそこで生きていくのがつらいだとか苦しいだとか、そんなことは必ずしもないわけですよ。そういう場所であれば、じゃあそこに呼んできたいのは誰なのか。若い人を呼んでこなきゃいけないと必ずしも考える必要がないのであれば、それなりのプレゼンテーションの仕方やそれから体験ツアーを組織する場合にしたってプレゼンテーションの仕方があるわけなんです。

イケダさんもブロガーであられるんですけど、体験をデザインするっていうのはインターネット上のブログが一番典型的なことですよ。あるいはインターネットビジネスの多くも基本的には、例えばある意味アマゾンのような、e-コマースでもそうですけど、基本的にインターネットにアクセスしたものはインターフェースってやっぱり体験なんですよ。体験をどうデザインするのか。そういう意味では、例えば高知県の何々町、何々村あるいはそのPRの情報源になるようなブログを立てるとした場合に、それをどう組織するのかっていうことからかなり真剣に考えたほうがよくて、僕がいつも思うことは、その真剣に考えることの目的っていうのは熟議の目的と同じで、それが真剣に考えた結果何か成果を生み出すっていう、あるいは熟議の成果を生み出すっていうこともさることながら、真剣に考えることで、本人たちが気づいていけることがたくさんあるんですね。熟議もそうです。熟議を通じて気づいていくっていうのがたくさんあって、それで今までより違ったやり方でやっぱりおれたち仲間じゃん、なんてなるんですよ。あるいは自分たちが実はシェアしていて、あんまりちゃんと自覚していなかった価値について、こんな価値をやっぱりシェア

してるんだ、共有してるんだなって気がついたりすることができる。

その意味では、実は第三者にどういう体験を与えれば、この村の村らしさが伝わるんだろうかっていうことを真剣に考えるっていうのは、自分たち自身が気づくために大変大事。そのときに1個だけ付け加えると、実は灯台元暗しっていうことで、実は自分たちが持っているものやリソースの価値を結構自分たち知らなかったりするんですよ。だってムカデがすごいなんていうのは、よそから来た人がムカデに価値があるんだと言ってるわけで、ムカデなんて何なんだよっていうことになるわけでしょ。だから第三者の視点というのは実は非常に大事で、えっそんなにも価値があるのっていうふうになる。それも気づきですよ。そうすると、ムカデがたくさんいるっていうのはいいことなんじゃないか。僕はムカデあまり実は好きじゃないんですよ。でも昔いた京都の山の中にはムカデが結構いるんですよ。日頃ムカデと向き合っていると、こんなもの好きになるやつの気が知れないんですけども（笑）、第三者が言うところがいいんだよって。えっ、そうなのかってなったりするんですよ。だから、そういう意味では第三者を入れる。閉じないで、別の視点から見たときに価値があるかどうかということを検証するというのも大事だと思いますね。

（東森）

ありがとうございます。第三者、つまり高知に暮らしている私たちはもしかするとなじみ過ぎていて、いつもそこにあるので感じていないようなことが、エリア外の方、県外の方とか観光でおいでになられた方とか、あるいはイケダさんのように、ビビッとした瞬間に移住で来られた方が「これってすごいじゃん」ということに気づかれると。何でこれに価値付けて、売らないの、お金に換えようとしなの、これをビジネスベースに乗せないのっていうような素朴な疑問が、その方たちの胸の中にはある。でもそれをコーディネートして形にしていくのは、もしかするともともと今いる高知の私たちかもしれないし、きょうの表題にあるように若い世代の方が、これは高知にもともと由来する方でも、そ

うでなくてもイケダさんのように、高知で何か可能性がありそうだなと思われた方、それをつくっていきけるような環境を整えていくということが一つポイントなのかもしれないですね。

私もある種、ノマドワーカーなところがあって、以前は会社勤めしていましたので、コピー機だって使い放題、会社に電話だってあるわけですね。もちろん事務所というスペースがあって商談だってそこでできるわけですけど、1人ぼっちになった瞬間にそれらは全てないんですね。かと言って町中にそれが整った場所があるかという、高知って結構そういうところないですよ。よく電源カフェって言いますが、スマートフォンとかパソコンを充電しながら仕事ができる場所ってどれだけあるか、高知に。ちょっとずつ増えてはいますが、ほんとちょっとずつなんですよ。スターバックスはWi-Fiはありますが、コンセントないですね。そんなような環境があつたりするので、もしかすると条件整備の中にはそういうフリーランスの人たちが働けるような共同シェアオフィスとか、そういうところを充実させていくというのもあるのかもしれないですね。ご質問を、今一つご紹介をさせていただきましたが、会場の方からいただいている質問を少しダイジェスト的になるかもしれませんが、少し触れながらこの先、進めていきたいと思いますが。

今、質問表をザッと見ましたら、少子化に対するご質問と言いますか、ご意見みたいなものがちょっと幾つかありまして、イケダさんはお子さんをお連れになって高知に来られた。先ほど自己紹介の中で、保育園に関することなんかもお話されてましたが、先ほどの宮台先生のお話を受けて、外からやってきて高知の子育て環境は、こんなところがすげえぞって。逆に若者世代の人たちにもこういうことを知らないんだったら知った方がいいよとか、高知にもし、さっきの性欲の減退みたいなものがありましたけど、子どもを生み、育てるんだったら高知のこんなとこいいよみたいなところが、外から来たから気づいたみたいなことがあればぜひご紹介ください。

(イケダ)

やっぱり東京から比べたら圧倒的に子育て環境はいいので、それはもう皆さんはご存じなことだと思います。人と人とのつながりが強くて、商店街のおっちゃんと、僕高知市内でやっぱり仲良くなって、おっちゃんが何か通りすがりにうちの娘可愛がってくれたりとか、そういうの東京だと基本ないですよ。

後は自然がすぐそこで、うちは岡崎牧場が車で5分かな、なのでちょっと気が向いて牧場行って、おいしいアイス食べて、牛に触れたりとか、すごいですよ。20分行けば仁淀川があるみたいな、そういうところは圧倒的に自然があつて人の環境だったり良くて、一方で教育環境についてはよく言われますね、高知は教育環境悪いんじゃないかと。僕はもう何を言ってるんだお前みたいな感じがすごくしてしまいますね。今はインターネットがあれば勉強できます。僕も低偏差値の高校でずっとネットで、当時2チャンネルを使って勉強してました。それでも、早稲田大学政治経済学部、半年で受かっています。もうひたすら勉強をネットでやりました。今そういう人って全然珍しくないですよ。なので、うちの娘は、できれば嶺北高校で育てたいなと思ってますけど、その気になれば別に嶺北でもハーバードぐらい行けると思います、全然。日本の東大なんか当たり前ですよ。絶対行けますから。なので、教育環境が悪いとかっていうのは、みんな勘違いしているのは早く何とかしてくださいと思ったりもします。

で、子どもの話ですよ。普通に考えると別にいいんですよ。多分、都会に比べたら全然もう高知の環境はすごくいいので、それはしつかりPRしなきゃいけないと、当たり前としてあつて、できることはたくさんあると。

僕は、高知市の地方創生関連の有識者会議へも参加していて、そこで東森さんも参加していますね。そこで話題に出てすごくいいなと思ったのは、高知市はやっぱり希望している子どもの数に比べて、実際に生んでいる子どもの数が少ないですね、当然。詳細な数字は忘れましたが、ざっくりいうと2人欲しいけど1人しか子どもがいないみたいな世代が

やっぱり高知市は、まだまだ多い。それは全国的な傾向で、感覚的に言ったらもちろんやっぱり欲しい子どもの数は当然持っていた方がいい社会だと思います。

なので、先ほど僕はビッグイシューというところの仕事をしていた話をしましたが、やっぱり若い世代、特に子育て世代の一番大きなネックになっているのは住宅の問題です。住宅費の問題だという調査をビッグイシュー社内でしています。そちらもすごくざっくりいうと、お金がないので親の実家を出ることができないんですね。親の実家を出ることができないので、出会いもないですし、結婚の願望もすごく減退しているというような調査が、サンプル2,000ぐらい取ってやっています。都市部の若者に聞いたデータなんですけど、多分恐らく高知でも同じことが言えると思います。僕ら同世代、20代ぐらいの方ってやっぱり手取り低いですよ、なかなか高知で普通に働いていますと。そうすると、一人暮らしができなくて実家に閉じこめられていって、場合によっては親の介護しなきゃいけなくなって、当然結婚できない。なので、まずやっぱり住宅の、若い世代がしっかり、独身ないしカップルだったり、子育て世代が入りやすい住宅というのをきちんと提供しないといけないと思うので、そこがすごく高知の、というか日本全国の課題だと思います。

意識スタイルですごく面白かったのは、シェアハウスをつくったり、あと婚活シェアハウスみたいなをつくったら、子どもが生まれるし、結婚する人増えるんじゃないかって感じがして、それすごく面白いなと思いました。各自治体、それは感覚的には恐らく効果があるんでしょうね。20代ないし大学生でもいいと思います。若い方々がすごく安く入れるドミトリ型のシェアハウスをつくってあげる。家賃1万円ぐらいで、ちゃんと負担してあげて安く入れる。それで若い人たちが集まってきて生活をしたら、多分そこにいる人たちは付き合って、結婚して、何とか共働きで暮らしていくと思うので、住宅面の何らかの施策、婚活ないし少子化と絡めて住宅問題をしっかり考えていって、先ほど、自立だったり個人の話がありますが、もうやっぱり住宅を個人で手配するのって、すごく今の若い世代は

めちゃくちゃ難しいです。

それこそ東京なんかだとホームレスになっている若者すごく多いです、ホームレス1歩手前でネットカフェ難民って言葉はご存じかもしれませんが、ネットカフェだったりマクドナルドで寝てる人多いんです。僕の友人もマックで寝てるやついます。やっぱりそれはおかしいわけですよ。おかしいので、やっぱり国ないし行政がしっかり住宅を提供してあげる。それは間違いなく少子化対策とつながっていく話なので、その流れをしっかりとつくりたいと思っています。だから2方向をですね、高知は子育て環境は都会に比べれば絶対いいので、PRをしっかりとするというところと、もっと強化するために住宅の支援というのをできるだけ早くやっていかないといけないねという話を、有識者会議でちょっと話し始めたら疲れちゃって。

(東森)

疲れさせちゃってごめんなさい。でも、その住宅支援という中で、高知って結構車がないと移動が不便と言いますか、車の保有率って高いですよ。家と車って基本的に申込体系が違うので、家を借りる、あるいは買うっていうのと車を買うっていうのは別で考えがちなんですけど、例えば先ほど言われたシェアハウスであつたりとか、一般の賃貸住宅でも車付きだったらいいのになつていう考え方が、この前ちょっと他の香美市の方の移住支援をされている方からあって、高知って何でそれ別々なんだろうと。家に車が付いてればいいのに。車込みの家賃価格設定になってるとありがたいのになつていうのはあったんですね。

(イケダ)

またまた、それはすごい面白いですね。その観点は非常に同意も感動もしますね。多分、移住者の発想ですよ。僕らも移住したときは車なかったんで、今は自分で調達しちゃいましたが、やっぱりそういう物件があれば、多分県外から住みたいと思う人は当然、ある種高知を優先的に見てしまうでしょうし、当然いいでしょうね。面白いですね。そういうアイデアが多分、住宅周りでまだまだあるは

ずなんです。それをやっぱりしっかり出し合って、幸いにして高知県が当然人口が少ないので、行政の人との距離感がすごく近いので、彼らも別に悪い人ではないというか、当然町を良くしたいと思って働いている人が大半なので、そういうところへしっかりアイデアを提供して、一緒につくっていくところができる、もっともっと高知は面白くなりますよね。

（東森）

ありがとうございます。少子化に関するご質問をいただいているんですが、それと並んでもう一つ多いのが、宮台先生が前段のところでおっしゃられていましたけども、深いきずな、コミュニケーションですね。例えば、ここにいただいているご質問の中には、親の価値観に左右されないで、自分の生き方を見つめる若い世代が増えていることには良い変化というふうにおっしゃいましたけども、性的退却の現実や深い人間関係をつくる能力が貧弱になっていることは、未来世代の危機的状況だと感じますが、これについてはいかがでしょうかということで、宮台先生にご質問いただいています。

（宮台）

これは最も深い、大きい要因は子育て環境にありますよね。それは、僕はいろんな幼稚園、小学校、中学校、高校、大学生、いろんな人間たちと接触する機会を絶えずキープしようとしているんですが、そうですね、幼稚園、保育園、小学生の親のレベルでいうと、とにかく子ども同士のトラブルに速攻介入するんですよ。けんかを許さないんですね。僕は、京都で育ったんだけど、京都にいたときには、子どものけんかに原則親も介入しないし、女の子たちも周りで取り囲んでいても、誰も先生にちくらないんですね。さすがに、目つぶしとか首絞めとか、いろいろやばいことが起こると親が先生に呼ばれるんですが。

僕は小学校6年生の秋に東京三鷹市に引っ越してきたら、何かけんかが始まる寸前にちくられて隣の教室から担任が飛び込んできたりとかしてですね、何だこのクソな学校はって思ったのをよく覚え

てるんです。しかし、今それは完全に当たり前のことです。例えばうちの子どもが完全自由保育の、一番近い幼稚園に行きました。子どものけんかに原則介入しないんですね。そうすると、僕はそういう介入しないっていうふうに推奨してきた立場なんですけど、いかに介入しないのが辛いのがよく分かりました。具体的な話はいろんなことがあるんですけど、介入してくれたら子ども同士のトラブルが解消して、幼稚園に行きたくないって言ってる状態から助けることができるんじゃないか、とかですね。

実際ここはそろそろちょっと入ったりしていただいた方が、いやあと3カ月待ちましょう、いや3カ月待てば子どもは自分でこの問題を必ず解決する。子どもがそれを解決したときに、それが自信になって経験として蓄積されて、必ず次につながるんです。我慢したら、本当に子どもたちはそれを解決をして、しかも、うちの長女はボスっていうか、長女ともう1人の女の子が幼稚園でボスを張り合っていたんですよ。すごいいがみ合っていたんですけど、それでどっちが押して突き落としたとか何とかって言って。子どもは親が喜ぶことを言うから、やられたんだね？やられた。何だクソ、やられちゃったのかって思ってるんですけど、向こうの親も多分同じだなという感じで思ったりして、そんな感じです、親ってのは。介入したがつっちゃうというのはよく分かるんですけど、でも、介入しないっていうことの大切さというのは、昔の親の方がよく知ってたと思う。

それは、ジャン・コクトーが「子どもの領分」という本の中で言ってたけど、子どもの領分をいかに確保するのかっていうことが、実は肝心要だったんだと思うんですね。しかし、それがなくなってしまったので、まず辛苦のトラブルを自分で解決した経験がない。あと本気になってけんかをした経験がないので、これ一つ例を教えると、僕京都で育ったときに毎月何回か取っ組み合いのけんかがあって、クラスで。今はないと思いますが、そういうことは、けんかというのは非常に大事なんですね。子どもの領分なんですけど、やり過ぎると大人の介入を招くんですね。しかし、けんかをびびってるとヘタレだと思われるんですね。だからプロレスと同じ

で、できるだけ派手な技をかけるんだけど、本当はダメージはほどほどだみたいな、そういうのをやるんですね。でもしかし、本気でやってるように見せなきゃいけないわけです。そうすると、そういうけんかを続けていると、だんだんけんか慣れしてくるんです。本当に怒ってるような怒鳴り声を出しながら、頭の中はものすごく冷めている。あるいは、いろんな演技をやったりする。

ここが結構大事なんですけど、僕と同年代ぐらいの教員に学生を叱らない人が出てくるんです。僕らの年代から。僕と同じぐらいの年代ですよ。なんで？って聞くと、自分の感情の制御ができるかどうか自信がないから、と言う人が多いんですね。えっ、そんな昔からけんかしてりゃあるじゃん。けんかしたことないもん。僕の同世代ぐらいから都会で育つと、けんかを許されなかった人もいますですね。そういう人間はけんかはできない。

もう一つ、昔けんかが普通だったころは、取っ組み合いを含めて、けんかをするとう仲良くなるっていう智慧をみんな知っていた。映画監督の園子温っているでしょう。僕と最初の出会いは20年前です。こういうトークイベントで壇上でものしり合いになったんですね。「何だこの野郎、表に出ろ」とか言って、表へ出ようと言ったら店の人が、トークゲストが表に出てどうするんですかって止められたことがありました。中森明夫という評論家で、「オタク」という言葉を発明したので有名になったけども、最初は彼ともものすごく仲が悪かったんですよ。でも仲が悪くて、けんかから始まる関係は結局最後それがいいものにつながっていく経験があるっていうふうに、みんなその世代が、みんなじゃないけど、一部は知っているんで、けんかを恐れないんですよ。

これが、何かにつながるかもしれないなと思いつながら、けんかをするということもあるわけですよ。それが今の若い人たちには全然経験がないし、経験がないだけじゃなくて、そういう僕が今申し上げたようなマインドですよ。けんかをして仲良くなるっていう、それはよくあることなんだけど、それが信じられないみたいな。今の学生は大半がそうですね。こういう人間たちが同性の友人だけじゃな

くて、異性に対して適切に振る舞えるとは僕は思えないんですね。

例えば、異性同士の今の若い人たちの付き合いっていうのはね、ラインの戯れに象徴されるような、あるいはボットでもね、ボットってロボットですが、ボットでも区別がつかないようなどうでもいい戯れを永久にやって、その延長線上でセックスをする人たちが多いいですよ。ラインのメッセージを見せてもらったらクソなんです。何これ、相手ボットじゃんよう。相手が人間だってこと確かめてやれよ、みたいな感じなんですよ。だからそれは同じことなんですよ。基本的に本当に相手と共通性がどれだけあるんだろうかってことについて、自信を持っていないで腹を割らないんですよ。腹を割ったら全然違った人間だということがばれるんじゃないかっていうふうに恐れているから、絶えずラインっていった戯れを強迫的に続けているという感じなんですよ。

だから、そのラインで仲良さそうに見えるとかっていうのを親が思うかもしれないけど見てください。見せてもらって、ただしちゃんと合意を取ってね。本当に意味のないコミュニケーション。大学生同士のカップル、写真撮って送ってるんですよ。永久にその繰り返し。バカじゃない？腹割れよっかで。高知県の人みたいに。

(東森)

ありがとうございます。

もう1点ですね。コミュニケーション力を上げるにはどうしたらいいのかっていうのがあるんですけども。これ宮台先生のお話の中での質問ではあるんですが、これちょっと吉村さんに答えていただいたら面白いかなと思うんですが、その若者のコミュニケーション力が低下しているというのが宮台先生のお答えで、今の高知の人みたいに腹割れよっていうのがありましたけど、吉村さん、その辺りどうですか。

(吉村)

腹割れよって、ものすごく共感します。私はまだまだ若造なんですけど、やっぱりもっと自己主張

をした方がいいと思って、全くデマのない世界なんて何が楽しいんだみたいな、何かもうちょっと自分の意見、意思を持てたらいいと思ってるんですけど。それに行き着くまではやっぱりコミュニケーション能力っていうのが必須になってくると思うんですけど、私はそれを自分の中でコミュニケーション能力が少しは培えたかなと実感しているのは、やっぱり大学での学びが大きくて、先ほど少しお話をしたように、私のゼミは中山間地域にフィールドを置いているので毎週のように出かけているんですね。その地域に出かけて、私が初めてその地域の方と接したのは、山菜教室で初めて、何も分からないままゼミに入って初めての活動が山菜教室で、何で天ぷらを揚げたり切り刻んだり、何でこんなことをしてるんだろうみたいな。何か料理クラブじゃないのになっていう印象だったんですけど、やっぱりそれは意図があって、そこで初めてアイコンタクトが取れたんですね。

そこに2回行くと、次は何か「おかえり」っていう雰囲気になっているんですよ。そうやって受け入れてくださっている中で、やっぱり大学生っていうのは、地域の人がすごく喜んでくれるんです。大学生でなくても、若い人が出かけて行って、若い人がおるっていうだけですごく温かく迎えてくださって、その中でも一過性じゃない関係を築くことができたなら、それがすごくコミュニケーション能力を培えるなと思って、実際に私もゼミでプロジェクトを任せていただいたんですけど、それは地区運動会のプロジェクトだったんですけど、そのリーダーになったときに初めて、今まで先輩の後について先生の後について地域に出かけて行ってたんですけど、1人で行ったときに全く何もできなかったんです。何をしゃべったらいいのかも分かんないし、どんなふうに話を進めていっていいのかも分からなかったんですけど、やっぱり何回か行ってるうちに、何となくそういう空気だったり、人っていうのが顔と名前が一致してきたりしたら、やっぱり向こうの人とかも笑顔が増えてきて、その中で、すごくそういうプロジェクトで顔を合わせているうちに協力もしてくださるようになるし、それが成功したとき、また次のプロジェクトをやろうとなったときに、すごく

期待をしてくださるんですよ。その期待に何とか応えたいと思って頑張って成功したときのその喜びっていうのは、すごく大きくなって。

やっぱりそこで感じるのは、こんな私でも地域のお役に立つことができる。そこに居場所があるんだなっていうのがすごく実感することで、やっぱり若者っていろいろ悩むんです。何か自分のことも分からないし、自分がこれからどう成長していくべきなのか、どんな職業に就いていくべきなのかって分からない中で、そういうことを体験して、自分にも居場所があるってことが分かったら、あつ、じゃあ私はこの地域で生きていける。私はここでも役割を持つて頑張っていけるんだっていうことが分かったら、いろいろ姿勢が変わってきたりするっていうことは体感したことでした。

（東森）

なるほど。多分、あれでしょうかね。認められるとか、評価されるとか。必要とされるというようなことが、若者たちにとっては自分の居場所として、存在価値を自分で自分に見出すみたいな。なかなか自分発で自分がここにいていいんだとか、自分が役に立ってるんだっていうのはちょっと感じ取りにくいことかもしれないのが、地域のいろんな年代の方、同世代の方も含めて、言ってもらえることで、ああ自分が必要とされているんだなと。自分が気が付かなかった潜在的に持っている能力が、この場で役に立ってるんだなというふうなことが認識されるということなんでしょうかね。

（宮台）

今、吉村さんがおっしゃったのは非常にいい例で、自分だけだったらそういう、今までコミュニケーションしなかったけど体験するっていうチャンスもなかったし、やらなければいけないという意識もなかった。でも、ゼミのいわばタスクフォースというか、ゼミの目的として、そこに行ったらやらなければいけないということになるから、人がどういふふうに行っているのかというのを見て、自分もそれをやらなきゃいけないんだなとかっていう、学ぶということがありますよね。

実は、僕はこの2年間、ナンパ講習みたいなのをやってたんですね。それは昔、僕たちが若いころは、さっきもちょっと言ったことだけど同性の友人や先輩から教わったんです。昔ナンパっていうとまず2人組で先輩が僕について、「まずおれがやるから見てろ」って、「見たな」「はい」「じゃあお前がやるんだ」ってやるんです。うまくいかない。「ほーら、宮台、どこが駄目だと思う」「えーと、どこが駄目だったんでしょうね」みたいな。つまり、こういうふうにしてコミュニケーションというのは良くなっていくんですね。なので、「ほら行け」と言われて行くわけです。「ほら行け」と言われなかったら、そんな知らない人に声かけるなんてできないけど、先輩が言うからしょうがないから行くんですよ。先輩が反省しろっていうからしょうがないから反省して、どこがいけなかったんだろうなと思って。

結局、さっきのプールの話と同じで、コミュニケーションも自分がやりたいことだけやる。やりたくないことはやらない。見たいものだけ見る。見たくないものは見ないというという世界にいる限り、残念ながら絶対上達しないですね。そういうような意味で、やっぱり若い人たちのコミュニケーションの能力を上げるというのは、単にコミュニケーションの仕方を教えるというよりもそういう人間関係の中で、おれがやってみる、まねしろ、そしてやっていく。この関係をどれだけ大人や年長者がつかれるのかっていうことがすごく大事なんですね。

(東森)

そういう部分である意味、恥を恐れずやってみせて、もしかして失敗する姿も含めて「ほらな」っていうところで共感するみたいなところも、痛み分けみたいなところで必要なかもしれないですね。

もう大分時間が差し迫っていますが、ちょっともう一つ、皆さんのお話聞いてて思ったのは、方言ってあるじゃないですか。いわゆる高知で言えば土佐弁、高知弁ってありますよね。今日の私もそうなんですけど、吉村さん、結構流ちょうに標準語的にしゃべってますが、高知の人ってそういう切り分けってできますよね。こういうところでは末尾に

「ちゅう」も付けないし、「やき」も付けずにしゃべれるじゃないですか。で、そういう臨機応変さもあるなというふうに自分で思ってるんですけど、イケダさん高知に来て、方言がコミュニケーションの障害になるとか、入りにくいとか、イケダさんの心の中で「おれもいつかは土佐弁しゃべれるようになりたいな」と思っているとか、もし若者が高知に戻って来たときに、しばらく外に出てたから土佐弁となじみが薄くなったから入りにくいなと思ったりとか、イケダさんのようにしゃべってなかった人が来たときに、言ってる意味が分からないから、ちょっとコミュ障になるみたいな、そのあたりどうですか。方言について。

(イケダ)

意味が分からないということは基本的にはないですね。何だかんだ標準語に、現代語ですからね。でも、時々タクシーに乗ったときにおっちゃんが早口過ぎて分かんないことはありますよね。すげえ早口で何か土佐弁だと分からないことがある、いくつかな。それは多分ご本人の個人の問題なので、同じようなことは標準語でもありますから。

でも、小咄的に実際に移住者の方に聞いたのは、こっちで「借りる」を「借る」って言うんですね。だから、「借りた」が「借った」になる。なので家を借りた、土佐山の移住者の方で、地元の方に「家を借ったの（借りたの）？」って聞かれて、「いえ買ってないです、買ってないです」。何か全然意思疎通できない。「借りた」と「買った」とずれてたみたいなのは3カ所ぐらいで聞きました。それは話で具体的にずれるというのがありますけど、でも、何というかそのくらいですかね。

土佐弁は面白いので、僕は個人的に学んで、使えるようには多分なれないような気がするんですけど、でも学んで、文法がすごく面白いんですね、文法を学びたいというのはありますね。あとは別に方言自体はそんなに、そこがコミュニケーションの障害になるかっていうと、別にそうではなくて、逆に円滑剤になるような感じすらあって、やっぱり僕らみたいな移住者からすると、方言ってすごく重要な共通の話題になるんですよ。分かんないことといっ

ばいありますから、ほんとに。語の変化が未だに僕分かんないですよ。「ゆう」と「ちゅう」の使い分けがまだ分からない。10回ぐらい聴いたけど、「雨が降りゆう」と「雨が降っちゅう」の違いが分からない。多分、高知の人は分かるじゃないですか。僕もう10回ぐらい聞くけど未だに意味が分からない。何かそこすごく話題で盛り上がっていくので、僕も全然理解できないですけど、毎回話題で盛り上がるので、そういうところは別に習得する必要も移住者はないと思います。それがコミュニケーションの障害になることも基本的にはないでしょうし、でもプラスで使える部分ってすごく多いのかなって感じで認識してますね。

(東森)

私も先ほど言いましたように、マクドナルドとかに行って仕事したりすることがあるんですね。そうすると高校生たちがやってきたりして、会話をそれとなく聞いてるわけじゃないですけど聞こえてくると、「そうながって」とか「やりゆうがって」というのを聞くと、脈々と受け継がれてるものはやっぱり受け継がれてるんだなと。別に親は土佐弁を教えるように思って教えてるわけではなくて、日常会話で子どもと話す中で言葉が乗り移っていつてるじゃないですか。親が関西人だったら「なんでやねん」とか「どないやねん」という言葉が、多分きつと高知にいる子らに移ってるんでしょうけど、図らずも高知に生まれているから「なっちゅう、やりゆう、そうながって」という言葉がつながっていく。

その子たちが一旦ちょっと四国外に出たりとか県外に出たときに、さりとて胸の中にはしっかりと土佐弁が残っているわけですよ。「やっちょっちゃっちゅうて言うちょっちゃって」が分かるんです。何日前のフェイスブックにこれ出てましたよ。難しい土佐弁なんですって。「やっちょっちゃっちゅうて言うちょっちゃって」というのは分かんないらしいですよ、県外の人には(笑)。何か過去完了形なのか何とか完了形が混ざってる難しい土佐弁らしいですけど。分かりますよね、私たちは。ていうのが今の恐らく高校生に言っても分かるんですね、中学生ぐらいでも今の言葉を言っても、多分意味が分か

る。

こんなようなことが、もしかするとなぜ若者が地方へ向かうのかっていう中で、言語、言葉、方言みたいなのがちょっとDNA的にひも付いているものがあるって、回帰させるもののヒントになるのかなって思ったりはしています。どんなにちっちゃい子でもしゃべりますもんね、土佐弁。親との会話が意味が通じてますんで、「それ取っちょっちゃってや」って言ったら子どもはそうかなって、取らんといかんのかなっていうふうに思いますのですね。

そんなことをちょっと思いながらもですね、お時間がそろそろ締めに近づいてまいりましたので、最後まとめて宮台先生お願いしたいんですが、その前に、イケダさんと吉村さんに今日の表題にありますけど、「若者はなぜ地方へ向かうのか」というところで、若者が地方へ向かうのに何か必要なこととか、何か物だとか、もしかして情報なのかもしれないけども、何が若者を地方へ向かわせるのに必要なのかみたいところを最後のまとめの的に述べていただいて、総括を宮台先生にお願いできればと思います。じゃあまず、イケダさんからお願いしましょうか。

(イケダ)

いくつか、無数にあるのでいくつかかいつまんでっていう感じになると思いますけど、一つはやっぱりよく言いますが仕事ですよ。今日はその話題になってないんですけど、仕事って一般的には高知には仕事がないっていう認識がまかり通っている気がしますけど、僕は仕事は全然あると思いますし、何か仕事がないというのは完全に嘘でしょうっていう感じだと思います。

僕が住んでる本山の大石というエリアでも仕事はあります。余裕であると思います。何とでもなりますし、多分楽しい仕事があると思います。それは具体的には時間もないので言わないですが、たくさんあるんですよ、実際。他の方もやっぱり同じようなことを言ってます。仕事がないっていうのは基本的にマッチングの問題というだけであって、仕事はあるけれども、それが都会に伝わってなかったり、それを欲する人に伝わってないから、仕事がないとい

うだけの話であって、そこはだから、今僕の知人なんかも高知ジョブみたいな、高知の仕事ジョブの集まりのサイトをつくるみたいな話をしている方がいたり、また他の求人サイトの方も、今地方を見てるんですよ。

なので、それも時間の問題で、いずれ解決すると思います。今後3年ぐらいで多分、地方のジョブってどんどんインターネットに吸い上げられていって、それを本当に気軽に、移住をしたい人だったり、Uターンだったりの人がかなり見るようになると思います。さっさと、僕はそれが本業なのでさっさとつくってあげたいと思っていたりします。

あとは、やっぱり何しろ高知はまだまだポテンシャルとして面白いことがいっぱいできるようなところなので、面白い企画をやったりたくさんつくりたいですね。それがあると多分、高知の面白さというのはもっともっとよく伝わっていくと思います。僕は一応マッピングだったり、プランニングをするところが仕事でもあるので、やっぱりいろいろやりたいことが、僕だけでもあるんですよ。宮台先生の話なんか聞きながら、やりたいこといろいろあるなと。今新たに出てきたのは、例えば「年金暮らし村」やりたいですね。嶺北も限界集落は本当に人が住んでいないところがあったりするけど、もうそういうところを山ごと買い取ってしまって、年金だけで暮らせますよっていう村を創るとか。あとは嶺北引きこもり村とか、秘境を逆にこれでも幸せに生きられる、多分できますよ。多分それで仕事もつくれるし、あるので。例えば、山を買い取ってそれをやってしまふとかいう。あとは今はやりですけど、エネルギーを自給する。「オフグリッド」いうんですけど、電線から、完全にもう電線切って、でも都市生活っぽい暮らしができる村を創りましょうとか。

無数にありますよね。そういうことが多分、まだまだできるし、それは何というかもうやる人がいないだけの問題なんですよ。そういうことがすごくたくさんまだ残されているので、僕らもう既に高知に人がいるので、何かその、多分この中に山持っている方がいらっしゃるんじゃないですかね、ご親族で。結構いるんじゃないですか。山持ってるんだっ

たら、僕でももちろんいいですし、面白いことできる人いっぱいいるので、そういう人にちょっとコミュニケーションをとって、空き家でもいいと思います。空き船とかでもいいと思います。何か余っていて困ってる物は僕らを含め、多分使える人はいっぱいいるんです。それを使って面白いことをやると、高知って面白いなと。面白いことやってる人たちがたくさんいるんだという認識が出て、実際町に住んでいる人たちも楽しいですし、県外からもやっぱり人が来るようになる。そのポテンシャルが何かまだまだあると思います。それはやっぱりどっかで、ある種、ネタは打ち止めになるんでしょうけど、それはもういつのことやら、僕が死ぬまでネタは尽きないような気がするぐらい、たくさんできることがあって、その可能性というところに着目してバンバン面白いことを仕掛けていくっていうことをすると、若者がもっともっと高知に来ますし、それは今すぐできることなんで、僕も含め、今高知の若者を集めていろいろ面白いことをしているので、そういうところにぜひ周りもご注目くださいという感じでもあります。もちろん、仲間になっていただきたいというのはあります。

(東森)

ありがとうございます。それでは吉村さん。

(吉村)

私も声を大にして言いたいのは、高知には仕事があります。ただ、それが分かってないだけで、私が聞いた話では、香美市のある農家さんはウメの畑とヤッコネギで3人の子どもをりっぱに育てあげて職に送り出したという話を聞いたことがあります。でも、そういう話っていうのは聞かないと知らないんですよ。そういう情報をまとめて見せる化するっていうのが、今後必要になってくると思います。

それからもう一つは、やっぱり自分の地元で地域のために本気で頑張っている企業があると、絶対若者はそこに残ります。私みたいな価値観を持つ子っていうのは、絶対そういうところは魅力に感じて、やっぱり高知県民って高知が好きなので高知のために頑張っている企業というのはすごく魅力に感じる

んですね。そのために頑張りたいという、そういう価値が今の若い世代の価値じゃないかなと私は思っているの、これは訴えとかになると思うんですけど、ぜひ地元のために長期的に未来を見据えて頑張る企業があると、絶対そこに若者は残ると思います。以上です。(会場から拍手)

(東森)

ありがとうございます。力強いメッセージありがとうございます。

このね、拍手が起こるという、この共感力はいいですよね。私が同じことを叫んでも多分拍手は起きなかったと思うんですけども。ちょっと嫉妬してしまいました。すみません。

宮台先生、実は質問はまだまだ他にたくさんいただいてまして、後ほど、またお目通しいただいたらと思うんですけども、すみません、時間の関係で限られたご質問しかご紹介できなかったんですけど、最後、総括的にコメントをいただけたらと思いますけど、よろしくお願いします。

(宮台)

僕は京都で育ちました。しかし71年以降はずっと渋谷のあたりに行ってらっしゃるんですね。一時期神奈川県にいたこともありますけども、渋谷に出入りして40何年かな。僕が思うのはね、東京も昔はこんなにつまらない町じゃなかったんですよ。渋谷、新宿、池袋、それぞれ僕は微熱感と呼びますがね、そこにいて同じ船に乗っているような感覚があったし、そこにいて人間たちは赤の他人だとは思えないから、ストリートブームもあったし、クラブブームもあったんですね。しかし、気が付いてみると、渋谷なら渋谷の町に行ったら違う人間は全くの赤の他人にしか見えなくなってしまうんですね。

そういう意味で言えば、大都会が駄目だとかそれに比べて地方がいいというような話では単純には言えず、地方も今そこにいて何か全部をシェアしている感じであったとしても、しばらくすると渋谷なら渋谷が冷え切ってしまったように、赤の他人がただそこにいてというふうになってしま

う可能性があります。そうなっていく地域というのは、むしろ多いんだというふうに思うんですね。

そこで、何に気を付けるべきなのかももう一度考えてみたいんですけど、僕さっき言った恋愛関係の講習やワークショップを、最近、もう2年以上やっているんですけども、これは簡単にいうとお節介なんです。余りにも自分たちの教え子が悲惨な状態なので何とかせないかなということで、昔の、僕は化学部にいましたけど、僕が化学部の先輩に教わったということをやっぱり教える義務があるなと。つまりお節介をする必要があるなということです。お節介をすると、ちゃんとやるんですよ。昔とおんなじじゃん、なんですね。若い人たちが変わったっていうふうに言い切ると、僕たちは免罪されるけども、若い人たちが、語弊があるけど、ちゃんとするように働きかけてあげる。巻き込んだりするというのをね。やっぱり年長者は都会ではその辺りやらなくなったということです。しかし、その分まだタイムラグ、こういう言い方も冷たいかもしれないけど、地方の一部ではまだ昔のお節介の人たちがいる。知らない人であっても巻き込んでいてるし、困ってる人があったら知らんぷりしないでいろんなことをやる。東京ではそういうのは知らんぷり、というのは当たり前ですよ。

そういう意味で、都会と地方が違ってくるというふうになり切ってしまうと、地方も今の都会と同じようになってしまう可能性がある。いくらでもあるから、じゃあ都会が今のように冷たい場所になってしまったのはどうしてかを考えて、そうならないための実践を繰り返すということが大事なのだと思うんです。それは、よく言われるんですけど、演劇とかでは身体性っていうんですね。言葉だけで伝わらないオーラというのはたくさんあります。言葉を変えればエロスのもの、あるいは感情の世界ですね。今のインターネットの使い方では、言葉にならないオーラ、雰囲気を経験させるというのは非常に難しいことなんです。だから、インターネットなどで合意をしたと思っていただけ、いざ宮台に会って見たら全然雰囲気が思っていたのと違ったっていうケースも複数ありますよね。その意味で、例えば言葉にならないものをどれだけ敏感に察知したり、あるい

はその言葉にならないものに反応する力っていうのは、言葉にならないものをちゃんと感じろっていうふうに言う大人たちがどれだけいるかってことが大事だと思うんですね。

さっきラインの戯れの話をしましたけど、その特徴はね、ものすごくオーラが出てることだと思うんですよ。言葉の戯れではあるんだけど、ものすごくオーラに長けている。それを絵文字で、あるいはスタンプで埋め合わせているんですね。これはオーラの反対ですね。あまりにも安易で低レベルで人間の感覚を鈍化させるんです。そうじゃなくて、例えば言葉を使って言葉にならないものを伝えられることができるだろうかみたいなことがすごい大事なんだけど、それも年長者が言わないと、今のままだと言葉とか目に見えるものにしか反応してないじゃん、というふうに誰からも言われない。

そういう意味で言えば、例えばきずなをつくる、それを可能にするというのは、ほとんど難しいことだというふうに思うんですけど、それも彼らが悪いとかっていうのは駄目で、年長者から教わって、お前駄目なやつだな、お前言葉しか反応できないとか、やっぱり言われて、そうか言葉じゃないのか、おれ鈍感なんだなって反省して前に進もうと思っている。それはお節介なんです。そういうお節介を言う大人が必要で、それを多くの、親は無理なんです、親はうざいだけですから。やっぱりそれを、昔伊丹十三が「モノクル」という雑誌で「斜めの関

係」って言ったけど、その地域の変なおじさんでもいいんです。いろんなちょっかいを出してお節介をして、いろんなことをアドバイスしていくみたいな関係があれば、その地域社会の地域性が、高知の高知らしさが残るし、それがなければあっという間に潰れていくんですね。

（東森コーディネーター）

ありがとうございます。

微熱感、そこにいる人間は赤の他人に思えなかったとか、まさにそれはひろめ市場がそんなような場所なのかなって、今瞬間思いましたけど、お節介とかですね、キーワードをいくつか出していただきました。

今日は「若者はなぜ地方へと向かうのか」ということで連続シンポジウム第3回目をお送りいただきましたけど、3人のパネラーの皆さんから発せられたキーワードをぜひ皆さんそれぞれのご活躍をいただいている場面場面で活用していただきまして、少しでも若者が地方へと向かう、若い世代の方が高知へと向かってくるといような流れを創り出していただけたら、私どもも本日のシンポジウムを開いた甲斐があると感じておりますので、今後ともどうぞよろしくお願いしたいと思います。

それでは、以上をもちまして本日のシンポジウムをお開きとさせていただきますと思います。ありがとうございました。

